ESD

ユネスコスクールで学ぶもの、育てるもの
学習指導要領、学校経営、地域社会、国際社会などとの
関りを改めて考える

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

日本ユネスコ国内委員会 Japanese National Commission for UNESCO

第11回ユネスコスクール全国大会

持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会

ユネスコスクールで学ぶもの、育てるもの
学習指導要領、学校経営、地域社会、国際社会などとの
関りを改めて考える

報告書

開催日：令和元年11月30日（土）
会　場：福山市立大学
主　催：文部科学省／日本ユネスコ国内委員会

文部科学省 平成31（2019）年度
日本／ユネスコパートナーシップ事業

第11回ユネスコスクール全国大会
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会

報告書

［日時］令和元年11月30日（土）

［会場］福山市立大学

主催：文部科学省　日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、福山市、福山市教育委員会、広島県ユネスコスクール連絡協議会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省、環境省、広島県教育委員会、福山市公立小学校長会、福山市公立中学校長会、広島県連合小学校長会、広島県公立中学校長会、広島県私立中学高等学校協会、広島県公立高等学校長協会、広島SDGsコンソーシアム、広島県ユネスコ連絡協議会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、公益社団法人日本PTA全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、ESD活動支援センター、日本ESD学会、株式会社教育新聞社

協力：伊藤忠商事株式会社、オムロン ヘルスケア株式会社、カシオ計算機株式会社、住友林業株式会社、株式会社三菱UFJ銀行、株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー、社会福祉法人広島県共同募金会、社会福祉法人福山市社会福祉協議会

目　次

◆総括 …… 6
◆実施概要 …… 7
◆告知 …… 8
◆大会日程 …… 9
◆開会式 …… 10
◆基調提案「ESD・学校教育における実践の展望」 …… 12
◆特別講演「ユネスコの理念とESD」 …… 16
◆パネルディスカッション
「ESDで学ぶ平和～広島の中高生が学び、語る平和の在り方」 …… 20
◆分科会
【ワークショップ】
ESDで育む資質・能力を考える――学習指導要領の趣旨を生かして …… 29
SDGs教材の開発をどう進めるか――児童生徒の行動変容を視点に …… 29
ESDを軸としたカリキュラムマネジメント――学習指導要領の趣旨を生かしたホールスクールアプローチ …… 30
ESDの視点で教員の働き方改革を実現する――組織改善を視点としたホールスクールアプローチ …… 30
持続可能なESDのための教員の資質能力の育成――学校全体で取り組むリーダー教師の育成 …… 31
ESDとSDGsで学校種間の連携をどのように進めるか――地域を巻き込んだ連携の推進 …… 31
【テーマ別交流研修会】
環境問題を生徒が『ジブンゴト』とする取組 …… 32
平和のための学び ESD for SDGs――持続可能な社会づくりに向けて育む力 …… 32
ESDで進める特別支援教育――多様性を視点に学校全体で取り組む特別支援教育 …… 33
ユネスコスクールが行う海外連携――海外の事例から地域の課題を学ぶ …… 33
命を守る教育とESD――災害体験を生かし、地域とともに命を守る行動力を育てる …… 34
地域社会とともに取り組むESDとSDGsの活動のあり方とは …… 34
◆ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動の紹介） …… 35
◆閉会式 …… 38
◆アンケート結果 …… 40
◆協力企業・展示団体一覧

総　　括

第11回ユネスコスクール全国大会―持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会が2019年11月30日、広島県の福山市立大学で開催され、全国から教員ら約800人が参加した。また第10回ESD大賞の表彰式も同時に開催され、文部科学大臣賞に福山市立福山中・高等学校（髙田芳幸校長）、ユネスコスクール最優秀賞に東京都多摩市立連光寺小学校（棚橋乾校長）がそれぞれ選ばれた。主催は文部科学省と日本ユネスコ国内委員会で、教育新聞社などが後援。

開会式に登壇した佐々木さやか文部科学大臣政務官は「小学校の新学習指導要領では、持続可能な社会の創り手の育成が掲げられ、各教科にも関連する内容が盛り込まれている。新学習指導要領に基づく取組の普及は、各ユネスコスクールの教育実践の蓄積が大きな鍵となる」と挨拶した。

基調提案では広島県教育委員会教育長の平川理恵氏と、前宮城教育大学学長の見上一幸氏が登壇。

「ユネスコの理念とESD」をテーマに講演した平川教育長は、ユネスコの理念や県の教育実践について触れた上で、「まず教師が本当の意味で主体的にならなければいけない。教師自身が『自分とは何者か』『何のために教師をするのか』と認識し、それを安心して開示できる職員室があり、自己表現の場があることが大切。ESDやSDGsの成功の鍵は、教師一人一人の認識だ」と強調した。

見上氏はSDGsについて「学ぶ」から「行動する」へと変革していかなければならないとし、「ESDは取り組んだから自然と能力がつくわけではなく、質が大切だ」と改めて指摘した。

パネルディスカッションでは、10月に開催された、仮想世界を舞台に繰り広げる教育型シミュレーションゲーム大会「ワールドピースゲーム2019 inふくやま」（https://www.kyobun.co.jp/news/20191028_05/）に参加した中高生４人が登壇し、ゲームの感想や平和の在り方について意見交換した。

福山市立福山高校の前田響さんはゲームを通して課題解決能力が上がったと言い、「解決するだけでなく、解決した内容を周りに伝え、促すことまでが、本当の課題解決だと分かった。世界中で起こっている課題も日々の勉強も全部つながっているし、つなげて考えることができると気付けた」と話した。

さらに、12のテーマでワークショップや交流研修会を実施。ワークショップではESDの視点を取り入れ、教員の働き方改革やカリキュラムマネジメントについて、参加者らが意見交換した。

また、交流研修会ではESDやSDGsを踏まえた環境教育や特別支援教育、防災教育の事例が発表された。

これまでの10回に及ぶ大会の経験を基に今大会は、ESDを軸に、学習指導要領や学校経営、地域社会、国際社会などとの関わりを改めて考える機会となり、大盛況のうちに終了した。

実　施　概　要

■日　時　令和元（2019）年11月30日（土）　受付９：15～　開会10：00／閉会17：00

■会　場　福山市立大学（広島県福山市港町二丁目19番1号）

■対　象　ユネスコスクール教員、一般幼小中高校教員、都道府県・市区町村教育委員会、
ユネスコスクール協力者（企業、NGO／NPO、PTA、大学生、専門科等）、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、一般参加者等

■参加者　総計 805名

■主　催　文部科学省　日本ユネスコ国内委員会

■共　催　ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラム
福山市
福山市教育委員会
広島県ユネスコスクール連絡協議会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■後　援　外務省、環境省、広島県教育委員会、福山市公立小学校長会、福山市公立中学校長会、
広島県連合小学校長会、広島県公立中学校長会、広島県私立中学高等学校協会、
広島県公立高等学校長協会、広島SDGsコンソーシアム、広島県ユネスコ連絡協議会、
全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、
全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、
日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、
公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivnet）、ESD活動支援センター、
日本ESD学会、株式会社教育新聞社

■協　力　伊藤忠商事株式会社、オムロン ヘルスケア株式会社、カシオ計算機株式会社、
住友林業株式会社、株式会社三菱UFJ銀行、株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー、
社会福祉法人広島県共同募金会、社会福祉法人福山市社会福祉協議会

告　　知

■チラシ

（表）

（裏）

■ポスター

大 会 日 程

時間	プ ロ グ ラ ム
09：15～	**受付**
10：00～10：20	**開会式** **挨拶** 佐々木　さやか（文部科学大臣政務官） 安西　祐一郎（日本ユネスコ国内委員会会長） 杉野　昌平（福山市副市長）
10：25～11：15	**基調提案** 「ESD・学校教育における実践の展望」 見上　一幸（前宮城教育大学学長） **特別講演** 「ユネスコの理念とESD」 平川　理恵（広島県教育委員会教育長）
11：20～12：40	**パネルディスカッション** 「ESDで学ぶ平和～広島の中高生が学び、語る平和の在り方」 司会：末吉　里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使） 登壇者： 大久保　帆夏（広島県立安古市高等学校２年） 前田　響（広島県福山市立福山高等学校１年） 大津　貴寛（広島県福山市立城北中学校２年） 岡田　琴美（広島県福山市立精華中学校２年） 特別協力：広島県共同募金会、福山市社会福祉協議会
12：50～14：00	**ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動の紹介）** 伊藤忠商事株式会社、オムロン ヘルスケア株式会社 NPO法人いのちの教室、住友林業株式会社 株式会社三菱UFJ銀行、株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー
14：00～14：30	**ESD EXPO TIME** ユネスコスクール地域ブロック大会及びESD関連ブース展示の博覧時間
14：30～16：20	**分科会** （ワークショップ&テーマ別交流研修会）
<<休憩・移動　10分>>	
16：30～17：00	**第10回ESD大賞表彰式** **閉会式** **挨拶** 木曽　功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）
17：15～18：15	**情報交換会**

開　会　式

～第11回ユネスコスクール全国大会／持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会開催に寄せて

司会進行：磯谷 桂太郎（文部科学省国際統括官付）

◆佐々木 さやか（文部科学大臣政務官）

第11回ユネスコスクール全国大会（ESD研究大会）の開催に当たり、関係者の皆様に多大なご協力をいただいたことに心より御礼申し上げたい。また、日本ユネスコ国内委員会の安西会長におかれては約6年間にわたりお務めいただいた会長職を、本日11月30日をもってご退任される。長きにわたるご尽力に、この場を代表して心より感謝申し上げたい。

ユネスコスクールは、ユネスコの理念や目的を学校のあらゆる面に位置付け、「児童生徒の心の中に平和のとりでを築く」ことを目指す世界的な学校ネットワークである。文部科学省では、ユネスコスクールを「持続可能な開発のための教育（ESD）」の推進拠点と位置付け、活動の質の向上に努めてきた。来年度から小学校において全面実施される新学習指導要領では、その前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科などにも関連する内容が盛り込まれている。新学習指導要領に基づく取組の普及に当たっては、これまで各ユネスコスクールで取り組まれてきたESDに関する教育実践の蓄積を活用することが鍵となる。

本大会のテーマは「ユネスコスクールで学ぶもの、育てるもの」であるが、加えて新学習指導要領の考え方も踏まえ、「ESDで育む資質・能力・行動の変容」「カリキュラム・マネジメントとホール・スクール・アプローチ」「地域と共にある学校とユネスコスクール」という3つの柱が掲げられている。社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現することが求められる中、本大会が各学校にとって、そのための指針を得る機会となれば幸いである。

広島県と福山市ではESDの推進に大変熱心に取り組んでこられた。この地で本大会が開催されることを大変喜ばしく思っている。開催に当たりご尽力いただいた関係の方々に深く感謝申し上げるとともに、本日ご来場の皆様には、ESDの更なる充実のためにご協力をお願い申し上げて、ご挨拶とさせていただきたい。

◆安西 祐一郎（日本ユネスコ国内委員会会長）

本日はご多忙のところお集まりいただき感謝申し上げたい。また、ユネスコスクール関係者の皆様には、日頃より持続可能な開発のための教育（ESD）をはじめとするユネスコ活動の推進にご尽力いただいていることに厚く御礼申し上げたい。この度、ESDの推進に熱心に取り組んでこられた広島県福山市の地で、第11回ユネスコスクール全国大会が開催されることを大変嬉しく思っている。

今秋のユネスコ総会では、ESD推進の新たな枠組みである「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて（ESD for 2030）」が採択された。ESDはSDGsの17すべてのゴールの達成に貢献するものであり、ESDの提唱国である我が国には、引き続き国際的な動きをリードしていくことが求められている。

日本ユネスコ国内委員会の会長として、この6年間、関係者の皆様と共に新たな時代におけるユネスコ活動の在り方を希求してきた。その成果として今年10月18日、日本ユネスコ国内委員会として「ユネスコ活動の活性化について」と題した建議を文部科学大臣及び外務大臣に提出した。

地方創生や多文化共生といった我が国の今日的課題への対応が求められる中、各学校がユネスコスクールネットワークという世界的な学校間ネットワークを最大限に活用し、主体的に国内外のユネスコスクールと交流するとともに、地方自治体、NPO、民間企業など、さまざまな関係者との連携・協働を進めていただきたいと切に願っている。また、本大会で得られる成果も活用しつつ、各種ステークホルダーとともにESDをはじめとするユネスコ活動に先導的に取り組まれ、普及に努めていただくことを期待している。

我が国のユネスコ活動は質量ともに世界に誇るものである。これは関係者の皆様、特に本日ご参集いただいている皆様のご尽力がきわめて大きい。このこともぜひ共有したい。改めて本大会を支えるあらゆる皆様に深く感謝申し上げ、益々のご活躍とご多幸をお祈りして、私の挨拶とさせていただきたい。

◆杉野 昌平（福山市副市長）

本大会が多くの皆様のご列席のもと盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げ、47万市民を代表して全国から「100万本のばらのまち福山」へお越しの皆様を心より歓迎したい。本来なら市長がご挨拶申し上げるところだが、都合により出席が叶わないため市長の祝辞を代読させていただきたい。

「第11回ユネスコスクール全国大会が当地で盛大に開催されることを心からお喜び申し上げ、全国からお越しの皆様を心より歓迎したい。

本市のシンボルの一つである福山城は2022年に築城400年を迎える。今年は、福山藩の初代藩士、水野勝成公が備後に入封して400年になる年でもある。また、江戸幕府で10年以上の長期にわたり現在の内閣総理大臣にあたる老中首座を務めた阿部正弘公は、わずか17歳で第13代藩主に就任した。国内外の問題が山積する中、正弘公は身分に関係なく有能な人材を幅広く登用し、安政の改革などを進めた。幕府の中核で激しい時代の変化に直面する中、新たな時代に向けて有能な人材を育てる必要性を感じ、自らが収める福山藩に身分に関係なく学べる新しい藩校「誠之館」を設立するなど、次世代を担う人材育成に尽力した。

正弘公が生きた時代と同様に、変化の激しい先行き不透明な時代に移行していく今、我々には持続可能な社会の担い手づくりが求められている。本市においては長年の取組をESDのふたつの観点を持って整理し、日々の授業を通じてすべての教育を「21世紀型“スキル&倫理観”」でつなぎ、その一斉の取組を継続的に積み上げていく「福山100NEN教育」を推進している。ESDの推進拠点であるユネスコスクールの取組は、その人材育成の中核を担うものであると確信している。本大会を通して全国各地の交流の輪がより大きく広がり、本大会の成果が全国に波及し、SDGsの目標達成に向けた人材育成につながるものと期待している。

結びに、本大会の開催に当り多大なるご尽力を賜ったすべての関係者の皆様に深く感謝申し上げるとともに、皆様方の益々のご発展とご活躍をご祈念し、お祝いの言葉とさせていただきたい。」

基調提案　「ESD・学校教育における実践の展望」
～「総合的な学習の時間」「総合的な探求の時間」を軸に

【登壇者】
見上 一幸（前宮城教育大学長）

第11回全国大会において、このような機会をいただけたことに感謝申し上げたい。

宮城教育大学を昨年３月末に退任した後、全国６つの学校からESDについてのご相談を受け喜んでお受けした。それらのご相談はすべて高等学校の校長先生からのもので、ユネスコスクールの状況が少し変わってきたように感じたことから、教育新聞に印象などを寄稿させていただいた。本日は、全国大会関係者の皆様からのお勧めもあり、その内容についてお話しさせていただきたい。

１）新学習指導要領とSDGsの効果

現在、高等学校でESD、SDGsへの関心が高まっているように思う。そうであれば、それはどういう理由かを考えてみた。日本におけるユネスコスクールへの関心は長い間、小学校で最も高く、ユネスコスクール数も小学校中心に増えてきた。中学校でも増えたが、高等学校での増加はそれほどでもなかったように思う。小学校で導入しやすかった理由のひとつは、ESDが「総合的な学習の時間」中心に行われていることが多く、教科全体を担任の先生がカバーできるという小学校の特性にあったように思う。中学校や高等学校では教科担任制で教科の壁があり、指導が難しかったことが考えられる。外国では高等学校の割合が高いのに、なぜ日本ではあまり広がらないのかという課題があるが、その状況が変わりつつあるのではないかと感じている。

訪問先の校長先生のお話のひとつは、新学習指導要領で「総合的な探求の時間」ができたことで「探求」の意味を考え、その「探求」をどう進めたらよいかを悩んでいるとのことであった。そして、そのような時期に国連でSDGsという具体的な目標がタイムリーに示され、ESDの目標が分かりやすくなったと話されていた。

新学習指導要領とSDGsの効果（１）

- ○ 新学習指導要領にESDが「持続可能な社会の創り手」として明記された。
- ○ 高校でも、新学習指導要領の「総合的な探求の時間」への対応を模索する中で、ESD /SDGsに関心が向いてきた。
- ○ わかりにくいといわれていたESDが、国連のSDGsという具体的目標が示されたことにより、分かりやすくなった。

２）地域に開かれた教育課程

では、学校としてどんな受け入れになるのか。2020年度からは「持続可能な社会の創り手」の育成という表現でESDが掲げられた新学習指導要領が、まずは小学校から本格実施される。この新学習指導要領で重要視された考え方のひとつに「社会に開かれた教育課程」があると承知している。この背景には、新たな時代、つまり高度なAIの時代における教育の全体像を、現段階では描き難いという点もあるのだと思う。変化の激しい社会を生き抜く子供たちに必要な資質・能力を育むために、学校のみならず、社会のさまざまなステークホルダーと連携・協働しながら教育活動を進めていくことが求められており、それが「地域に開かれた教育課程」ということだろう。つまり学校教育の目標・内容・資源を社会と共有することが大切である。近年、企業のSDGsへの関心が高まる中で、一般社員のSDGsに対する関心を高めたいという希望があるようだ。企業と学校の連携はこの問題にも貢献でき、両者にとって効果的だと思う。

３）教師にとって：学校の負担感と教科横断への戸惑い

校長先生からのご要望は、「ESDは先生方に新たな負担をかけるものではない」ことを伝えて欲しいということだった。学校にとってESD・SDGsに取り組む上での不安には、新たな課題への教員の負担感と、教科の専門の枠を越えた生徒の疑問に対応する教員側の戸惑いがあるようだ。

新たな課題への教員の負担感については、すでに取り組んでいる従来の課題を「持続可能な社会の構築」という視点で捉え直すことでESDになる。つまり、これまで行なってきたことを「持続可能性」で捉え直せばよいと納得できれば負担感への不安も軽減されるように思う。また、教科の専門の枠を越えた生徒への対応ということで教師側に戸惑いがあるようだが、これについては生徒自身が各教科で培った知識・技能を基本にして探求し、教師は自分の専門教科から離れ、考え方や調べ方のよき相談相手、よきファシリテーターとして相手をすればよいのではないか。実際、高等学校での「総合的な学習の時間」では、生徒に具体的な知識や技術を教えるのではなく、教科で培った力を活用するようなリードがされていると聞いている。

４）生徒にとって：“やらされる”から、自ら“やりたい”へ

ESDやSDGsをテーマにした総合的な探求の時間は、子供たちにとってはどうなのか。一部に受験勉強に役立たないなどの意見もあるが、「探究」のよい点は、学校での学習を生徒が「やらされる」から自ら「やりたい」に変わることでもあると思う。ここで大事なのは、生徒自身が課題を見つけるということで、先生が一方的に「疑問に思え」というのは苦痛になる。そのためには生徒が実体験をどれだけ体験しているかも非常に大事になる。また、教科では苦手なことも総合的な学習の時間でやると頭に入りやすいということもあるのではないか。スウェーデンの学校を訪問した際に山で算数を教えるというクラスがあり、山の自然の中で学ぶことでスムーズに頭に入るというお話を伺った。

SDGsを通じて学ぶことの目標については、いわゆる「学力の３要素」のひとつである「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」、つまり学びに向かう力、人間性などへの貢献が期待される。ESDやSDGsは「何のために学ぶのか」という学びの目標に力を与えるように思う。「どう生きるか」につながるということは、そのアプローチの多様性からキャリア教育としても役立つ他、ESDをテーマにした時、理系・文系の別なくアプローチするため、両方の視点から学べるのではないか。理系・文系の分断を埋めることになり、特にリベラルアーツの観点から重要ではないかとも思う。

５）ESD実践の課題～一層、求められるESDの質の向上

ESDを牽引するユネスコスクールでは大変優れた実践が数多く行われてきたが、質の向上において課題のある実践もある。「総合的な学習の時間」と教科の学力との往還が重要である。特に低学年での「総合的な学習の時間」での豊かな実体験は、感動することへの感性を育て、課題発見に向けて幼少期に大切だろう。それが高学年に進むに従って、教科で学ぶ知識・技能と連動し、その間で往還しながら知識・技能も深まり、考えも深まる。さらに自分が何のために勉強するのかという目的も明確になると思う。一方、イベント型の授業は子供にとって非日常の世界で反応も大きく、とかくイベント型に流されがちになるため慎重になる必要がある。イベント自体は重要な意味を持つと思うが、流されないことが大事である。

保護者から聞こえる声もある。「学校はESDをやっているようだが、受験勉強になっているのだろうか」

など、従来型の意識が保護者にある場合がある。先ほど申し上げた教科の知識・技能と結びつけることによって、総合的な学習の時間の経験が教科の学力にも結びついてくると思う。従って、指導の工夫によって、ESDでは学力テストで計られる学力以外の能力も伸びているはずであり、この点を注意しながら見て行く必要がある。いずれにしても、ESDの教育の質の向上は引き続き求められるだろうと考えている。

ESD実践の課題
一層、求められるESDの質の向上

- ○「総合的な学習の時間」の豊かな実体験を教科に活かす
- ○ 実践を単なるイベントで終わらせないこと
- ○ 「総合的な学習の時間」と教科の学力との往還
- ○ 「総合的な学習（探求）の時間」では、各教科で培った知識・技能をどう活用するかが重要
  →カリキュラム・マネジメントの重要性
- ○ 学力テストで測れる部分と測れない部分
  （数値で測れない能力もある）

6）ESDの視点で地域の課題に探求的に取り組む学校～課題の発見と探求のプロセスの重要性

学校はESDの視点で各地域の課題に探求的に取り組むことができる。実際、ESDでさまざまな能力が育成されると言われているが、ESDをテーマに掲げれば自然に能力が身につくものではない。ESDの質が重要で、そこには優れたカリキュラムマネジメントがある。いくつかのデータでそうしたことが裏付けられている。

「探求」の学習には、自らの課題設定、情報の収集、整理、分析、考察、まとめ・表現というプロセスが含まれる。とくにESDには、それに加えて行動の変容が期待される。カリキュラムマネジメントの往還が進むにつれ、教科で学んだ知識・技能がより高度なものになっていくのだろう。また、ESDで養われる能力には、クリティカル・シンキング、システム・シンキング、教科の知識や技能の活用、ICTなども含めたスキル、コミュニケーション能力などが挙げられる。これも指導がよければということだが、特に表現力やコミュニケーション能力という点で付け加えられるのは、人は感動した時に「人に伝えたい」と思う、ということである。スキルを磨くことも重要だが、子供たちがその感動を体験できるかが大切である。

7）ESD for 2030

ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）が2015～2019年の5年間実施されたが、このGAPの後継枠組みとして2020年～2030年までの10年間、SDGs達成に向けてESDのさらなる推進が求められている。今秋のユネスコ総会では、SDGs達成に向けての持続可能な開発のための教育「ESD for 2030」が採択され、本年末の国連総会で採択されると聞いている。

8）愛の反対は、無知と無関心

SDGs17の目標はどれも大きな目標である。中でも民族間の対立を無くし、平和を築くことは持続可能な社会の構築には大変重要だろう。とは言え、17の目標すべてが民族対立の種になり得、それぞれの目標は互いに結びついた関係にある。ESDはSDGsの実現に向けて一層重要になってくると思う。個人的には17の目標すべて大変重要だと考えており、地球温暖化問題も大変心配である。今年９月23日に、ニューヨークで国連気候行動サミット（UN Climate Action SUMMIT 2019）が開かれた。言葉ではなく行動について議論するために開かれたと聞いている。このサイドイベントして、９月21日に国連本部で「国連若者気候サミット UN Youth Climate Summit」が初めて開催され、スウェーデンの高校生16歳のグレタ・トゥーンベリさんをはじめ数百人の若者が出席し、気候変動問題について発言したことが報道された。世界的には若者の行動が各所で注目されている。

太平洋上の島国であるキリバス共和国は、地球温暖化による海面上昇で国が無くなる危機にある。仙台出身でキリバス共和国に帰化したケンタロー・オノさんは、「キリバスは日本のような国に比べて科学や文明の恩恵には浴していないし地球温暖化ガスも出していない。地球に悪いことをしていない我々の国が、地球温暖化によってなぜ消失しなければならないのですか」。そして「愛の反対は、憎しみではなく、無知と無関心なのです」と発言された。

愛の反対は、無知と無関心

９月の国連気候行動サミットのサイドイベント「国連若者気候サミット UN Youth Climate Summit」が初めて開催、高校生の活発な発言

“キリバス共和国のケンタロー・オノ氏の言葉から”
「愛の反対は，憎しみではなく，無知と無関心です。」

9）「SDGsについて学ぶ」から、「SDGsについて行動する」へ

これからの10年は、新たに始まろうとする「ESD for 2030」、SDGsの目標達成の年でもあり、新学習指導要領に対する評価が出る年でもある。従って「SDGsについて学ぶ」から「SDGsについて活動する」へ一歩進めることが大事ではないか。

ESDの10年間、海外ではフラッグシッププロジェクトというものが活発で、例えば、北欧バルト海を囲む国々の高校生が、海の環境保全に取り組む国際的な「バルト海プロジェクト」などが知られる。日本では近年、国内で高校生の活動が地域産業に貢献した例も多いが、国を超えた連携にまでは発展しなかった。日本の若者には内向きの考えではなく、グローバルな視野のもとに交流を活発にして「持続可能な社会の創り手」の理念の達成を期待したい。これからの10年は大切な時期である。皆様と力を合わせてESDを推進して参りたい。

「SDGsについて学ぶ」から、「SDGsについて行動する」へ

これからの十年

- ○「ESD for 2030」
- ○ SDGsの目標達成
- ○ 新学習指導要領

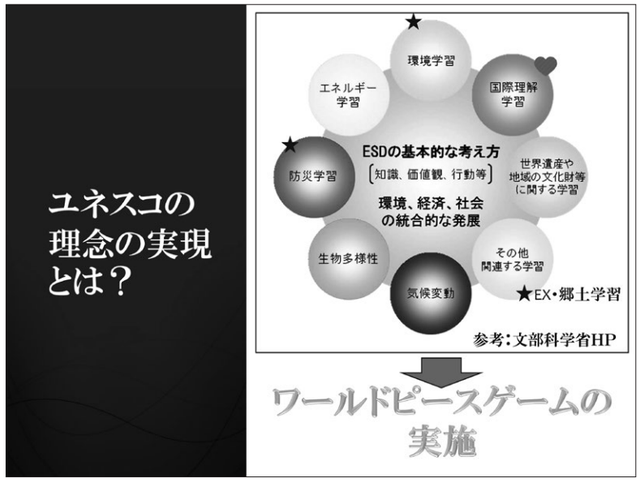
ご清聴ありがとうございました。

特別講演　「ユネスコの理念と ESD」

【登壇者】
◆平川理恵（広島県教育委員会教育長）

昨年４月に広島県教育委員会教育長に就任したが、それ以前は横浜市立中学校２校で８年間校長を務めた。本日は「ユネスコの理念とESD」ということで、校長時代の体験も含め、ユネスコスクールとの出会いなどについてもお話ししたい。

１）ユネスコの理念とは？



ユネスコの理念は「ユネスコ憲章」に表出しており、その前文には、「この憲章の当事国政府は、その国民に代って次のとおり宣言する。戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」との記載がある。この「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という部分が、横浜の中学校でのユネスコスクールになるかならないかの決断に大きく関係した。

第一次世界大戦後、国際連盟が立ち上がり、ユネスコの前身組織とされる国際知的協力委員会が1922年に設立された。この国際知的協力委員会は、平和のために教育や文化がどう貢献できるかを考え、実行しようとした組織である。この委員会の理念や方針がユネスコに引き継がれ、ここで話し合われたのが、先出の「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」であった。当委員会の委員は当時12名で、アインシュタインやキュリー夫人など、さまざまな分野の著名人が集まっていたが、そうした中で委員会の事務を担当し、リーダーを務めたのが新渡戸稲造であった。私は多様な人たちを取りまとめていたのが日本人だと知って非常に驚いた。そして、このことに感動して横浜の中学校でもユネスコスクールになろうと思った。

このユネスコ憲章の第１条（目的及び任務）には、「この機関の目的は、国際連合憲章が世界の諸人民に対して人種、性、言語又は宗教の差別なく確認している正義、法の支配、人権及び基本的自由に対する普遍的な尊重を助長するために教育、科学及び文化を通じて諸国民の間の協力を促進することによって、平和及び安全に貢献することである。」と記載されており、これがユネスコの理念である。だからこそ、ユネスコの理念では、「平和」や「安全」への貢献の大切さが謳われ、ユネスコスクールには積極的に学習してほしいという思いがある。

先日、ローマ教皇が原爆被害を受けた広島に来訪された際、平和の集いに参列し大変感動した。82歳というご高齢にもかかわらずハードな日程をこなされ、演説では「戦争に原子力使用は犯罪」というメッセージを発信し、平和への貢献の重要性が強調された。

２）ユネスコの理念の実現とは？

「平和」を学ぶことは、ユネスコスクールに限らずESDの重要な視点のひとつであるが、広島県内のESDの取組を見ると、「環境」にフォーカスされることが多いと感じている。あるいは「郷土学習」や、豪雨災害に見舞われたこともあり「防災」に関する充実した取組が多くなっているが、今後は「平和」や「国際理解」という分野でのさらなる充実を願っている。

そこで、県教育委員会として「平和」を児童生徒に考えてもらう有効なひとつの学習方法として、「ワールドピースゲーム」を実施した。この後のパネルディスカッションでは、このゲームに取り組んだ生徒に登壇してもらい、どう感じたかを話してもらう予定になっている。

３）ワールドピースゲームについて

ワールドピースゲームとの出会いは、横浜の中学校での実践であった。素晴らしいプログラムで、さまざまな問題、例えば気候変動や移民など23のクライシスを５日間で解決していく。初めは「子供たちに23のクライシスの解決なんてできない」と思うが、子供たちは当事者として各国（A ～ D国）首相や大臣、国連、武器商人などの各種プレイヤーを演じているうちに、交渉カードを持って交渉するとか、いろいろなことを覚えていく。戦争をゼロにするのは難しいが、どう交渉すれば平和を築くことができるのか。横浜で実践した時に子供たちの頭のシナプスが急激に増えていく実感があり、「広島でもぜひやりたい」と思い、10月に土日と祝日を含め５日間実施した。

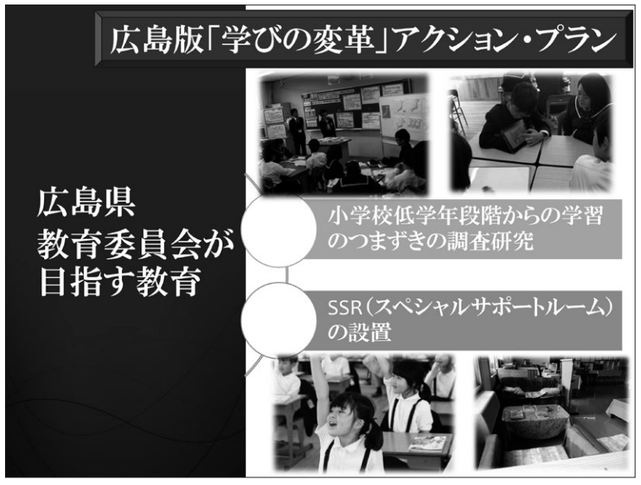
このゲームの魅力は、目的が世界平和にあるという点にある。例えば武器商社の社長役が、「僕は売りたくないが、社員が売りたいと言っているがどうしたらよいか」とファシリテーターに相談すると、ファシリテーターが「どうしたらよいと思いますか」と問う。「売らない」交渉を社長役が決める。主体性を持ち、他人ごとではなく自分ごととしての感覚を持ってゲームを進められる点が非常によい。例えば、A国首相という肩書きと役割を決めると、演じる人もその気になってくるというか、「その立場でものを言うというのは、こういうことなんだ」と役割を演じ切ってくれる。日常の学習では「A国では･･･である」など暗記型のものが多いが、そういうことではなく、「自分が首相だったら、あるいは防衛大臣や外務大臣だったらどうか」と考えながら役割を担うことができるので、「防衛大臣だったらこう言ってしまうだろう」ということを体験できる。そういう意味で、子供たちの「資質・能力」の育成に大きな効果があったと考えている。

４）広島県教育委員会が目指す教育

先出のユネスコ憲章前文に「この憲章の当事国は、すべての人に教育の十分で平和な機会が与えられ、客観的真理が拘束を受けずに研究され…」との記載がある。この「すべての人」というのが、教育の世界では重要なポイントだと思う。

広島県でも、難しいことではあるが、すべての児童生徒が右肩上がりに成長するということを目指している。「すべての児童生徒」というところが、今、大事なのではないか。例えば、小学校の学力学習状況調査は国が実施しているので、県教育委員会としては県での実施を見送っている。その代わりに、数え出し（指を使って数える）のできない子供が小学校で多く出てきていることもあり、小学校段階での低学年でのつまずきの調査を今年度から開始している。どこでつまずき、その要因は何なのか。そして、県教育委員会として何ができるのか、その革新に迫って行きたい。

まず、セーフティネットとして「スペシャルサポートルーム（SSR）」を設置した。横浜の中学校でも



不登校の生徒に向けて「特別支援教室」を立ち上げた経緯がある。横浜市の不登校の割合は約3.2%と言われ、赴任先の横浜市立市ヶ尾中学校、同中川西中学校にも着任時には、それぞれ15～16人、30人の不登校の生徒がいたが、この特別支援教室を立ち上げたことで校長退任時にはゼロになった。ゼロというのは文部科学省が定めた不登校の定義「年間30日以上の欠席」ということではなく、その子なりのペースで、例えば、体が弱いなどの自分の体調を考慮して、子供が「週３日来ます」などと申告してきたら、「わかりました。何曜日の何時に来ますか」と聞いてあげて、「僕は起立性障害で朝起きれないので月水金の１時に来ます」と子供が決めたら、必ず来るということである。子供のペースをつかんであげて、認めてあげれば必ず来ると思う。これからの時代、月～金曜日までただ座っていれば給料がもらえる時代ではなく、自分で働き方とか態度とか、すべて自分で決めていかなければならない。学校もそれに合わせる形が必要ではないかと考え、広島でもスペシャルサポートルームを設置したことで徐々に効果が出ている。

瀬戸内海に浮かぶ大崎上島という美しい島に、広島叡智学園というインターナショナルバカロレアを基にした全寮制の中高一貫校を総工費70億円かけて設立した。今年度４月から１学年40人の生徒を迎え、高校からは外国の生徒20人が加わり、総勢１学年60人になる。また、４月には「個別最適な学び担当課」という「個別最適な学びとは何か」を探究していく課を立ち上げた。この課では、インターネットやITを使ってどういうことができるか、福山市の小学校で来年度より準備が始まるイエナプランのカリキュラム作りなど、さまざまなことを担当している。一方、ひとつのことを探究したいという異才の子供の存在や、学校のカリキュラムに向かない生徒が不登校に多いということがわかっており、そうした子供向けに東大「異才発掘プロジェクトROCKET」というプロジェクトがある。広島においても、広島県教育委員会と東京大学先端科学技術研究センターが協力して「東大 ROCKET in 広島」を実施している。

イエナプラン教育校の設置については、福山市で日本初の公立小学校でのイエナプランのカリキュラムを作っている。簡単にいうと、数と言葉については１～３年生が１年生学級、４～６年生が２年生学級になり、異年齢で学級を編成していく。社会や理科、生活科については「ワールドオリエンテーション」という形で話し合いながら子供たちが進めていく。学年で分けるのもよい点はあるが、同年齢だと「あの子はできるが、この子は・・・」とか、授業中も子供たちが忖度してしまうことがある。社会に出た時に愉快な人生を歩んで欲しいというのが学校の目的だとしたら、社会と同じような仕組みでできないかと思い、福山市の三好教育長とも相談して、福山市の常石小学校で来年度から１～３年生の異学年で一緒にやることを考えている。今年も例えば、朝の学活で教頭先生が作ったサークル型のベンチで円になって皆で話し合ったり、１～３年生で算数のある単元について一緒にやってみるなどしている。そうすることで３年生が２年生を教え、２年生が１年生を教えるという形になり、１対多数の一斉授業ではなく、子供が子供を教え合うという形が生まれてくる。

もともと子供はシステム志向なので、ワールドピースゲームやイエナプランでも「これはどういう原因があるのだろう」とシステム的に考え、解決しようという能力が備わっている。ところが、それがどういうわけか消失し、受験のための勉強になりやらされ感になってしまう。そして、見上先生のお話にもあったが、「ESDは受験に関係ないから勉強ではない」という間違った見解が生まれると思っている。「受験のため」という側面もある種はあるだろうが、いろいろなコミュニティで人生を愉快に歩んでもらうことが学校教育の最終的な目的のひとつだと思うので、社会と同じような仕組みをつくり、話し合いによって解決することはできなくても、皆が納得する納得解を見出すことはできるのではないか。

「何のために教育制度があるのか」をよく考えるが、ふたつあると思っている。ひとつは、地球環境をどうするのかということ、もうひとつは、話し合いによってそれを解決するということ。民主的に話し合う練習を学校で担保していかなければならないと思う。これがESDでもあり、学校教育だと捉えている。

広島県においてもESDやSDGsに取り組んでいる学校は多いが、本当に質を高められているかというと、これからだと思っている。例えば、「子供たちは主体的にならなければいけない」と言われるが、先生は本当の意味で主体的になっているのか。極論を言えば、先生方も「私とは何者か」ということを感じ取り、自己認識して、自己開示が可能な安心できる職員室があって、そして自己表現できているという形になっていかないとSDGsもESDも何もないということになる。成功の鍵を握っているのは先生方で、「私とは何者か」「私は何のために先生をやっているのだろう」という認識と、「自己開示できるような安心した職員室と、その表現をする場がある」ということが大変重要であると思っている。

これからも広島県教育委員会では、「すべての子供のために」すべての子供が右肩上がりに成長できるような教育を一丸となって進めていきたい。

パネルディスカッション

「ESDで学ぶ平和～広島の中高生が学び、語る平和の在り方」

ファシリテーター :末吉 里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使）

本日のパネルディスカッションでは、「ESDで学ぶ平和～広島の中高生が学び、語る平和の在り方」をテーマに、教育型シュミレーションゲーム「ワールドピースゲーム」の体験をもとに、広島の中学生、高校生に平和に対する考えや思いなどを語っていただきたい。

まず、ご登壇いただく中高生の皆さんをご紹介する。

1. 登壇者紹介

【登壇者】

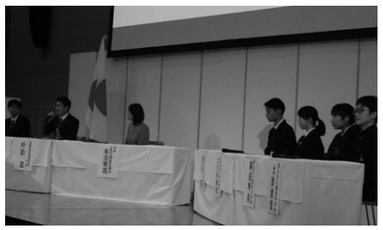
◆大久保 帆夏　（広島県立安古市高等学校２年）
◆前田 響　　（広島県福山市立福山高等学校１年）
◆大津 貴寛　（広島県福山市立城北中学校２年）
◆岡田 琴美　（広島県福山市立精華中学校２年）

2.ワールドピースゲーム概要について

ワールドピースゲーム（以下、WPG）は米国の元小学校教師ジョン・ハンター氏が開発し、世界各国で実施されているプログラムである。４つの国をもつ仮想世界を舞台に、生徒らが各国の首相や大臣などになり国家間の利害関係について交渉したり、宗教や自然災害に関する23のクライシス（危機）を解決するなどして、自国の発展と世界平和を目指すシュミレーションゲームである。

今年10月、広島の中高生がこのゲームを体験した。ゲームでは各国の内閣以外に国連や世界銀行、武器を販売する商人などを設置し、本物の世界さながらのリアルで複雑な世界情勢を読み解いた。他国の状況を踏まえて権力や勢力の集中を防ぎながら、世界平和を成し遂げていくため、生徒はチーム内だけでなく他国の生徒とも交渉を重ね、試行錯誤し、平和について考えた。まず、この興味深いゲームについてもう少し詳しく知っていただけるよう、広島県教育委員会のご担当者に取組の経緯及び概要についてVTRを用いてご説明いただく。

◆概要説明:叶松 忍（広島県教育委員会個別最適な学び担当主査）



WPGは今回、広島県で初めて開催となった。福山市内の中学生と県内の高校生の計33名が２日間にわたり大人顔負けの熱い議論を交わした。生徒たちに与えられたミッションはふたつで、世界中のすべての課題を解決することと、すべての国の資産を増やすことである。まさに国際社会の持続的な平和と発展を目指して真剣な交渉が行われた。１日目は宇宙、空、地上、海底という４層のタワーを使って世界各国の特徴や資産の状況を理解した上で、各自の役割や各国・機関の名称・シンボルなどを決め、２日目はクライシスレポートと呼ばれる世界が直面する国境紛争や食糧問題、難民問題など23のクライシスの説明を聞いて理解した上で、その解決に向けて各国で作戦を立てた。そして、いよいよゲームスタート。歴史的背景や利害関係が複雑に絡み合う地球規模の危機や課題の解決に向けて各国機関がそれぞれ交渉を進めた。交渉タイムが終わると、各国が交渉で形成された事項について順番に宣言を行う。この交渉タイムと宣言タイムを繰り返しながら、すべての危機を解決するために正解のない複雑な問題に５日目まで徹底的に向き合った。

果たしてすべての危機は解決したのか。生徒たちは、このゲームを通して何を考え、どのように行動したのか。５日間のゲームを通して大きく成長した生徒たちの姿を、まずはVTRでご覧いただきたい。そして、ESDの目指す持続可能な社会づくりについて一緒に考えていきたい。

（VTRの視聴）

3.生徒の発言

VTRの中で、生徒の表情が最初と最後で全く違ったのが印象的だった。このWPGには33名の生徒が参加したが、本日はその代表として４名の生徒にご参加いただいた。体験を通じて感じたことなどについてお聞かせいただきたい。

１）WPGで印象に残ったこと、特に学んだこと

まず、ゲームを体験して印象に残ったことや学んだこと、そして価値観や行動がこう変わったなど、変容の物語があれば、ぜひ教えてほしい。

◆大津さん（広島県福山市立城北中学校２年）

僕が今回、WPGを通して一番思ったことは、話すことの大切さである。相手に自分の意見を伝えることが一番大変で、相手に伝えるということは深い思考力や、自分の考えを主張する勢いなどが必要だと思う。また、ゲーム参加前は、高い地位の人、つまり権力を持った人が平和をつくればよいと思っていた。高い地位の人なら平和をつくりやすいし、ひとりが平和をつくれば周りのみんながついていくのかと思っていたが、今回のゲームによってその価値観が壊されたと感じた。ひとりが平和のために動いても、周りの人が動かなければ平和はつくれないと思うし、つくれたとしてもすぐ壊れてしまい無意味になる。周りの人が動いていかないといけないということを本当に感じた。また、僕は「秘密国家の首相」と「A国の防衛大臣」というふたつの表と裏の役職を担わせてもらったが、C国首相は頭がよく、僕が秘密国家の首相であることをすぐに見破った。心に目をつけて動かないといけないところが大変だと思った。

ファシリテーター：

大きな学びがあったように感じた。ひとりで動いてもダメで、皆で動かないと平和を築いていくことができない、ということを学んだということだが、本当に大切な学びだ。

◆岡田さん（広島県福山市立精華中学校２年）

「氷で閉ざされた小さな国」A国の首相に推薦された時は大変驚いた。また、当初は宇宙や海底、国の状況などに理解が追いつくか不安だった。２日目にクライシスレポートを読んだ時も、どういった解決法で誰と交渉したらよいのか全く分からなかった。その中で思ったことは、協力することが一番だということ。協力することで自分がわからなかったことやわかることを相手に伝えたり聞いたり、自分で理解することができるし、相手との関係も深まると感じ

た。後半になると徐々に流れがわかってきて、解決する内容も少なくなり楽になっていった。交渉などについても、当初A国では交渉や署名の場面が多くバタバタ状態だったが、協力したおかげで少しずつでも慣れていくと感じた。

ファシリテーター：
　協力することが一番大事で、自分がわからないことを相手に聞くことで相手との距離も縮まるし、理解も深まっていくというお話をしてくれた。

◆大久保さん（広島県立安古市高等学校２年）

　23のクライシスがあり全部頭に入れなければいけないこと、いろいろな角度から物を見ないといけないことも大変だったが、楽しかったというのが一番の感想である。学んだことには、「C国（一番豊かな国）と武器商人の間でしか武器のやり取りを行わない、それ以外の国が買いたい時はC国を通じて」という条約を、国連役の人たちが決めてくれたことが挙げられる。私は自分の意見をストレートに伝えることが苦手なので、自分の意見をはっきり伝えるという点を見習いたいと感じ、そうしたことを学べたことがよかった。また、C国の人たちの行動力も尊敬した。C国は秘密国家に再度対抗するために迎撃ミサイルを各国に整備したいと提案した。私は「運命の神」というまだ価値が決まってないものの価値を決める役を担当し、例えば、WPGの中でオリンピックを開催し、開催費用などを決定した。ICBMの価値が決まっている中で、C国はその価値・能力と迎撃ミサイルの能力を比較して、大体同じ程度の能力だから迎撃ミサイルはこの程度の価値にしたいと提案した。C国の迎撃ミサイルを開発したい、そのために行動したいという姿勢が非常に積極的で素晴らしいと感じ、私もそのように積極的になりたいと思った。

ファシリテーター：
　自分の意見をはっきり伝えることが大事で、他国の行動も尊敬できたということだった。意見を伝えながら行動に移すという点は、自分の生活にも結びつけることができたのではないかと思う。

◆前田さん（広島県福山市立福山高等学校１年）

　国連事務総長役を任され、すべての課題・交渉に関わったことから、今回のゲームについては僕が一番理解しているのではないかと思っている。そうした中で、WPGによって変わったと感じる点がふたつある。１点目は課題解決能力が上がったということである。課題解決能力というのは、課題を解決するまでが力だと思っていたが、解決したら終わりではない。解決したということを他の人に伝えなければならない。伝えるだけで終わってしまってはいけない。伝えて他の人を動かす、自分の行動を変えるという力も課題解決能力に含まれると思う。その能力が１日目から２日目に大きく伸びたと思っている。２点目は、日頃の勉強の大切さを感じている点である。WPGの中には解決すべき課題がたくさんあるが、その課題すべてがつながっている。一見つながっていないように見えてもつなげることができる。今の世界に置き換えて考えても、すべての国や文化はつながっているし、今ある課題をどう解決するかと言えば、他の人の考えを共有したり、他の人と話したりということが大事になってくると思う。そうした中でコミュニケーションがとれるかと言えば、僕は今、とれないと思う。だから日頃の勉強などが大切になってくるのではないか。

ファシリテーター：
　すべてがつながっていることがわかった、ということだが、まさにSDGsもそうだ。17すべての目標が総合的につながっているから、ひとつの問題を解決すると他の問題も解決することにつながるかもしれない。そして、コミュニケーションの大切さも話してくれた。

２）平和な社会の構築について～同世代の中高生に向けての訴え
　皆さんWPGを通してさまざまなつながりを体験されたということだが、そもそも広島というところで育ち、常に平和ということに向き合ってきたのではないかと感じる。このゲームを通じて、平和について思うところがあれば教えてもらいたい。平和な社会をつくっていくために、こういうことをしていきたい、学校ではこういうことに取り組んでいきたい、地域ではこういうことができるのではないか、などがあれば教えてもらいたい。

◆前田さん（広島県福山市立福山高等学校１年）
　「平和とは何だろう」と考えた時に、人それぞれ答えは違い、正解はなく、どれも正解だと思う。人により平和の価値観が違う状態で、どう平和に向かうのか。一人ひとりが持っている価値観を伝えればよいのではないか、伝えて行動する。これが課題解決能力にもつながるし、価値観が違うから諦めるのではなく、違うから伝えて行動することが大切になってくると思う。僕は価値観の違いがあるからこそできることもあると思うので、それぞれの価値観や思いを大切にしてこれからも行動していきたいし、皆さんにも価値観の違いを大切にして行動してもらいたいと思う。

ファシリテーター：
　平和は各々の価値観により異なるということ、伝え行動していく大切さについて話してくれた。

◆大久保さん（広島県立安古市高等学校２年）
　平和な社会の実現に向けて、協調性を高めることが大事だと感じた。最後に「勝利」を宣言した際に、自分の思ったことや将来のことを話し合う場があり、何人かが「ミサイルを飛ばしてみたかった」とか「クーデターとかを起こしてみたかった」と言っていた。その中の一人が「それでも自分がミサイルを飛ばせなかったのは、皆に協調性があったからだ」と言っていたので、改めて協調性を高めていくことが重要だと思った。また、印象に残っているのがゲームマスターの言葉である。私たちが「行動を起こしてよいか」と質問した際に、ゲームマスターが毎回言ってくれた３つの言葉「理にかなっているか」「行動の先を読んでいるか」「予算が十分か」がある。私はそれを言われるまで、WPGと現実を分けて考えていたが、ゲームを知って現実とつながっているということを改めて実感し、ゲームで出した「答え」というより、そこまでの「過程」を大切にすべきだと思った。そして、参加者にしか分からない課題解決の楽しさや難しさなどを感じられるので、ぜひWPGが普及してほしいと思っている。

ファシリテーター：
　協調性を高めれば危機を回避できるかもしれない。これは大人たちにも伝えたい。

◆岡田さん（広島県福山市立精華中学校２年）
　私は当初、戦争がなくなれば平和になると思っていた。しかし、貿易量も少なく食糧危機を経験していたA国首相を務めた時、病に冒されたC国首相の命を救う「命の水」をA国が保有していたことから、それと引き換えにC国から食料をもらうということがあった。「足りないものを補うためにどうするか」と考える時、助け合う方が平和につながると感じた。また、自分から助けてあげようという気持ちが大切だと思った。

ファシリテーター：
　自ら助けてあげると思うことの大切さ、助け合い、協調性などの学びが出ているが、大津さんはどう思うか。

◆大津さん（広島県福山市立城北中学校２年）
　皆さんは自分が主張した意見が真逆だった時に相手の意見を尊重できるか。平和に向けて相手の意見を尊重するということも大切だが、人としては難しいと感じる。心の中には相手の意見をあまり通したくないという「網戸」があると思う。僕は、ひとりでも多くの人の網戸を取り除きたい。そして皆の意見を混ぜ合わせた意見で、世界で起きているいろいろな問題を解決していきたい。人の意見を自分の意見と混ぜて主張するとか尊重するというのは本当に難しいことだが、それをすれば、逆に平和に一歩でも近づくと今回のWPGを通して心から思った。

ファシリテーター：
　重みのある言葉だった。相手の意見を尊重しないと平和を満たすことができない。網戸を取り除きたいというお話しだった。
　こうしたWPGの学びを通して、ESDでは地球規模の課題を自分たちのクラスや学校、地域での足元にある課題と結びつけていくことになると思うが、身近なところでこういうことをやっていきたい、展望などがあれば教えてもらいたい。

◆大津さん
　人と人とのコミュニケーション能力は必要な力だと思う。人と話す時や話せない時、一番必要な、すぐに口から出せる言葉は何だと思うか。僕は「挨拶」が人と人の心をつなげる言葉だと思っている。僕は小学６年生の頃から、すれ違う人に挨拶をするようにしており、毎日実践している。挨拶から会話が発展し、最終的には自分の意見が主張しやすくなると以前から考えていた。自分の価値観を伝えられる姿勢になると思う。今後も出会う人には全員、挨拶を交わせるようにしたい。

ファシリテーター：
　今日、大津さんに会った際にとてもよい挨拶をしてもらったが、そうした思いがあったことが分かった。人と人の心をつなげる挨拶はすぐにできることだと思う。
　今後に向けて、自分の周りでしてみたいことなどあればお願いしたい。

◆前田さん（広島県福山市立福山高等学校１年）
　今までグローバルに考える活動に積極的に参加してきた。今後もこうした活動に積極的に関わりたいと思っているし、僕たち中高生に、もっとこうした活動に参加してほしいと思っている。そこで僕がしたいことは、こういった活動をもっと伝えていきたいということである。今回のWPGは日本では19回目で、広島開催だったので参加させていただいたが、このWPGは１回参加すると二度と参加できない。19回すべてで解決の仕方や答えの導き方は違っていると思う。人によって価値観も異なるので、すべての人に考えてもらいたい。だからこそ自分がしたいのは伝えるということで、こうした経験を伝えることで、皆さんにも参加してほしい。もちろん今日の４人の熱い思いを大人の皆さんにも受け取ってほしい。だからこそ僕は、もっと伝える活動をしていきたい。

ファシリテーター：
　もっと伝えていきたいということ。友人などにも伝えられたのか。

◆前田さん
　家族に伝えた際に、「ゲームだろう」というようなことを言われた。でもこんなに楽しくわかりやすく世界を実感できるものはないと思う。だからこそ、みんなにやってほしい。参加しないと分からないこと、見えてこない世界はあると思う。そうした視点をもっと広げていきたい。

ファシリテーター：
　「楽しく」というのがポイントだと感じた。楽しくないと参加しようとも思えないし、広がっていかないと思う。若い皆さんが世界に出ていくのは資金的にも時間的にも難しいだろうが、日本に居ながらにして世界の課題を学んでいける、それを地域に引き寄せることができる、という素晴らしい経験になる。
　最後に同世代の人たちに伝えたいことなどあればお願いしたい。

◆岡田さん（広島県福山市立精華中学校２年）
　私の学校は同級生の人数が少なく１クラスで仲はよいが、思春期のせいか男女があまり話さず一緒に遊ぶことも少ない。班活動の際にはせっかく男女が同じ班になっているのだから、もっと一緒に取り組んでいくことが大事ということを伝えていきたい。

◆大久保さん（広島県立安古市高等学校２年）
　私は国際交流や平和のプログラムにいくつか取り組んできた。そこで学んだことを皆に知ってもらおうと話をすることもあるが、なかなか興味を持ってもらえず、参加してくれたらわかるのに、と感じている。１年前にオーストラリアに２週間留学し、その時から平和や国際問題について知りたいと思うようになり、このWPGにも参加した。１回でも国際交流や平和の取組に参加したら、価値観などが変わり平和への思いも具体的になると思うので、同級生や中高生が参加してくれたらと思う。

ファシリテーター：
　参加したいと思えるようなきっかけづくりを、大人たちが積極的に進めていかなければならないと思う。主体的、対話的で深い学び。広島県の平川教育長も先ほど、民主的に解決していく話し合いの場が非常に大事だというお話をされていた。
　いろいろな学びがあったが、最後に言い残したことがあればお願いしたい。

◆大津さん（広島県福山市立城北中学校２年）
　僕の将来の夢は何かと言うと外務大臣になること。今回のWPGではその夢に一番近い防衛大臣をやらせていただいたが、将来が見えたというか、夢を見ることができた。これが人生のピークでなく、スタート地点ということで外務大臣になることを夢見て頑張っていきたい。補足だが、選挙に出た時は１票をお願いしたい。

◆前田さん（広島県福山市立福山高等学校１年）
　個人的な話だが、僕には小さい頃から夢がある。その夢を叶えるために、このようなグローバルな活動に積極的に参加している。これまで夢を叶えるためにしてきたことに無駄なことはないと思っている。この機会をお借りして夢を宣言することで、自分のモチベーションを高めさせていただきたい。僕の夢は宇宙飛行士になることで３歳の時から変わらない。なれるかどうか分からないが、0.1%でも可能性があったら、その道を進みたいと思っている。言葉にさせていただくことで、この夢を絶対諦めずに進んでいきたい。皆さんにも僕のことを覚えていてもらいたい。こうした夢をもった高校生がたくさんいると思うので、そういった高校生がもっと自分の熱意を語れる場に導いていただければと思っている。

4.質疑応答

勇気をもって心の内を開いてくれた。鳥肌が立ち感動しているが、この若き皆さんに聞いてみたいと思うことがあれば質問を受け付けたい。

質問１）

素晴らしい学びの体験をご報告、ご提言いただき感動している。大津さんの「少しでも多くの人の網戸を取り外したい」という発言に感銘を受けたが、それとの関連で直前に言及された「相手と意見が食い違っている場合にどうするか」という問題について質問したい。特にグローバルな重要な問題に関して自分と相反する意見を表明された時にどう思うか。意見は食い違ったままでよいのか、あるいは何らかの形で意見が一致することを求めるのか。

◆大津さん（広島県福山市立城北中学校２年）

この世界の人口、約70億人の意見が一致することは難しいと思っている。意見が食い違った場合には、「あなたはこういう意見なんだね。だったらこれをうまく活用しよう」と考えてみたり、意見が食い違ってもよいと思う。いろいろな価値観や意見がある世の中だから、自分の意見を大切にしながら他人の意見も守り通していく。他人の意見を大切にしないと自分の意見はよくならないと思う。また、他人の意見ばかりを守りすぎると自分の意見も通らないし、自分の意見ばかり通し過ぎると嫌われる要因になる。食い違うことが自然なことで、食い違っていた方が楽しい。一致してひとつの行動をするのもよいが、食い違ってふたつのやり方で進めるのもよいと思う。

◆大久保さん（広島県立安古市高等学校２年）

私も同じように意見が食い違っていてもよいと思う。意見を否定したり、自分の意見を言えなくなったら、この世界はダメになると思う。他人の意見を尊重しつつ、意見が食い違っても互いが納得でき妥協できる範囲でコミュニケーションをとっていければよい。

質問２）

WPGの中で実際に政治家などになりきり、この経験を生かして、実際に世界で政治に携わる人に平和について言いたいことはあるか。

◆岡田さん（広島県福山市立精華中学校２年）

先ほど質問されたように、意見が食い違うことがあるから解決方法が出ずに平和が見えなくなる場合が多いと思う。私はWPGを通して、相手と意見が食い違うことは当たり前だと思っている。だからこそ、意見が出た場合には、その方法でどのようにしてやるかを説明したり、納得したりすることが大切だと思う。

◆大津さん（広島県福山市立城北中学校２年）

政治に携わっている方に言いたいことがふたつある。ひとつは、WPGを通して大変さを感じ、同情したということ。一つひとつの政治の課題を解決していくことと、一つひとつについて国民を動かしていく難しさが分かった。もうひとつは、もう少し単純な子供向けのニュース番組や小学生でもわかるようなニュース番組があれば、子供でも自分の意見を持てるだろうし、「僕はこっちの方がよい」という意見を持てるだろう。議員の方についても、他者との意見の交流が大切だと思うので、相手に伝わる簡単な言葉で簡潔にまとめて言った方がよいと思う。あとは絶対に隠し事をしないこと。

ファシリテーター：

厳しい意見をありがとう。今日は政治家の方も参加されているが、子供たちにもわかりやすい言葉で、などの意見をいただいた。

5.まとめ

パネルディスカッションのまとめに入りたい。まず、福山市教育委員会教育長から本日のご感想を、広島県教育委員会ご担当者から指導助言をいただきたい。

◆三好 雅章（福山市教育委員会教育長）

熱い思いをたくさんいただいた。私も皆さんに負けないくらい熱い思いを持って、何とか学校や学びを変えたい。皆さんが今日言ってくれたようなことを「自分の言葉で喋れる・喋りたい」「聞きたい」「一緒に何かしたい」、そんな学ぶ環境としての学校をつくりたい。それは授業だけでなくすべてについて。そうしたことをやろうとして広島県が「学びの変革」を掲げ、県内一緒になってやっているところである。まだまだ皆さんが学んでいる教室や学校は窮屈だと感じることがたくさんあると思うが、今日も平川教育長や県内のさまざまな教育に関わる方々や、皆さんを大事にして教育の姿を変えたいという多くの方々が集まっている。

政治や政治家に言いたいことをお聞きして、非常に「優しい」と感じた。批判など強烈な言葉が突き刺さるのかと思ったが、優しい。政治家などの立場で考えてみるからこそ、その難しさもわかるということ。ここに集まっている人たちは、何としてもそうした学びの場をつくりたいという思いを持っている。皆さんに申し訳ないという思いもある。だからこそ、「変えたい」「つくりたい」と思っている。まだまだ頑張るので、私の名前も覚えておいていただきたい。

◆指導助言:丸山 博章（広島県教育委員会義務教育指導課指導主事）

本日は、この取組で感じたことや考えたことを学校関係者の方々に向けてお話したい。

ESDの目指す「持続可能な社会の担い手」が、平和に関してどんな資質能力を持つべきかを考えると、いくつか側面があると思う。例えば、「平和を愛する心情」「なぜ紛争が起きるのか」「平和にはどんなプロセスがあるのか」などの人文的・科学的な知識であるとか、実際に前に進めるための課題解決とかコミュニケーションなどのスキルもある。平和を愛する心情については、広島県の教育では道徳科や特別活動などにおいて充実した取組があるが、残りの部分はまだ工夫の余地があると思っている。

工夫に対する答えのひとつは、今回のWPGにあると捉えている。彼らの学びの姿は紹介されたのでよいと思うが、どうしてWPGなのか。彼らと５日間を共に過ごして「WPGのよさとは何か」と尋ねてみた。答えは、例えば「解決方法が多様だから」や「ひとりでは解決できない」「皆とやらないと解決できないから」という答えもあった中で、一番多かったのは「大人ではなく、自分たちで何とかするしかないから」という趣旨の意見が多かった。生徒が主催し、自分ごとになっている。そんな話を彼らから聞いた時に、ESDで目指す教育活動や、今進めている教育改革と方向性が同じだと感じた。本当の意味で生徒に委ねる時間の重要性ということだと思う。「委ねる」と言いながら、授業者の思いを探るような活動ではなく、本当に子供たちが自分たちの力で切り開いていくという主体的な学びを子供たちに用意するということ。そうした活動でしか育たない資質能力もあるということを、彼らを見て感じた。

もうひとつは自分の話だが、生徒の限界を勝手に決めていたのではないかと感じている。企画している段階では、WPGは中学生には難度が高いと思っていたが、実際に始まってみると、中学生は自分のフィールドに物事を下ろしてしっかり考え、足りないものは調べてしっかり進めていた。このゲームは小学生を対象に行うこともあると聞いている。皆さんの発言にあったように、小学生は小学生のフィールドで考える平和があっていいし、中学生は中学生のフィールドで平和について悩み、考えてほしいし、

高校生は言うまでもない。

今回のWPGは、広島県教育委員会のひとつの提案として出させていただいたが、今回実現に達したような平和とか国際理解の学びの姿というものを、ご自身の学校や市町でどのように実現させていくかということは、これから私たちがいろいろ試し挑戦していかなければいけないことだと考えている。そうした学びを子供たちも求めていると、今日の彼らの姿を見て思った。

ファシリテーター：

先日亡くなられた緒方貞子さんの言葉に「深刻な問題を抱えた時に日本人はいつもそれに立ち向かい、克服をしてきました。しかし相互依存の中にあって日本だけを見ていて、すべてのことを克服していくことはできません。連帯感のある世界をどうやってつくったらいいか。これが私どもに与えられた一番大きな課題ではないか」というものがある。今日、皆さんが共有した学びというのは、まさにその連帯感をつくっていくような話だと感じた。

未来をつくる大物が福山で誕生した瞬間に立ち会えたという気持ちだ。こうした若者の夢を摘み取らないように、夢を実現していけるように、大人は若者と共に伴走していかなければならないと感じた。素晴らしい発言をしてくれた４名の生徒に盛大な拍手をお願いし、本パネルディスカッションの結びとしたい。

分科会

今大会は、下記３つを柱とし分科会を行いました。――テーマの末の①②③が該当します。

①ESDで育む資質・能力（行動の変容などを軸に）
②カリキュラム・マネジメントとホール・スクール・アプローチ（組織運営などを軸に）
③地域とともにある学校とユネスコスクール

第１分科会　【ワークショップ】「ESD で育む資質・能力を考える ――学習指導要領の趣旨を生かして」①

ファシリテーター　東京都多摩市立連光寺小学校　校長　棚橋　乾

これまで、発表されたESDの優良事例は多くあったが、ESDで育む資質・能力や汎用的能力は育成できたのだろうか。このことを調査するためにユネスコスクールである多摩市立小中学校や他地区校の小学６年生と中学３年生に、24項目のルーブリック形式の意識調査を実施し、4,600名の児童生徒の意識を集計した。この結果をもとに、これからの学校で実践するESDで育む能力･態度や、検証方法や評価方法について議論した。

ルーブリック評価は、ポートフォリオ評価と共にESDの評価に適しているとの意見が多くあったが、今回のルーブリックについては、①質問項目が多い。②各段階の解説文が難しい。といった問題点が指摘された。そこで、改善方法について意見を出し合い、KJ法でまとめて共有することができた。似た項目を合わせて項目数を減らしたり、平易な文に書き直したりすることで、ルーブリックの改善をすることができた。

第２分科会　【ワークショップ】「SDGs 教材の開発をどう進めるか ――児童生徒の行動変容を視点に」①

発表　横浜市立永田台小学校　教諭　飯干　望
　　福山市立福山中・高等学校　上山　晋平
ファシリテーター　ACCU　篠田　真穂
コメンテーター　東京都市大学　教授　佐藤　真久

本分科会では、持続可能な社会を生きていく児童生徒へ、変容をもたらすSDGsを軸とした教材開発のあり方、教材・書籍の活用方法について検討する場をもった。まず初めに、日々上記のようなねらいをもって学校・授業づくりをおこなっている教職員２名からの実践発表があった。一部の教員で進めるのではなく、学校全体で「持続可能な社会に向けてどのような子どもたちを育むか」検討し、そこに向かっていくためのカリキュラム、及び評価をつくる。また授業内においても､教科内の断片的な気づきだけではなく、子どもたちの教科を越えた気づきにも目を配る２名の教員の想いや、大切にしている視点を知った。その後、参加者同士の情報交換の場として、発達段階ごとに分かれグループ討議をおこなった。学校・授業づくりで実際に活用しているSDGsに関する書籍・教材の活用方法について情報共有したり、一見SDGsとは無関係に思えても、例えば、地域ごとの特徴など、捉え方よってはSDGsに向かうためのツールになり得ると言った議論であったり、重要な示唆に富んだディスカッションがおこなわれた。最後に、佐藤真久教授より教材や書籍は教員の捉え方、問いの立て方によって「学習財」として活かされるというコメントをいただいた。分科会内で共有された書籍･教材は今後､全ユネスコスクールへリスト化し共有する予定である。

第３分科会　【ワークショップ】「ESD を軸としたカリキュラムマネジメント ――学習指導要領の趣旨を生かしたホールスクールアプローチ」②

ファシリテーター　日本 ESD 学会　副会長　手島　利夫

第３分科会では、約70名の参加者を対象にワークショップを開催した。ESDが学習指導要領の基本的理念として位置付けられた社会的な背景や、取り組むべき学校教育の姿について各自の意見を共有し合い、それらを視点として学習指導要領の前文や総則を読み込んだ。

さらに、その要点について学び合い、ESDカレンダーの活用したカリキュラム・マネジメントの進め方への理解を図った。また学習方法として、主体的・対話的な学びの実際について、具体的な単元を取り上げて指導計画を考えるなど、事例研究も進めた。参加者からは「このようなワークショップを自校の研修会に取り入れたい」という声もいただき、当日のデータも共有することとした。

第４分科会　【ワークショップ】「ESD の視点で教員の働き方改革を実現する ――組織改善を視点としたホールスクールアプローチ」②

ファシリテーター　神奈川県横浜市立日枝小学校　校長　住田　昌治

ユネスコスクール全国大会・ESD研究大会で、学校の働き方について担当するのは、今年で３年目となったが、今回も会場には多くの学校現場の方々が集まり満席となった。いかに、現在の学校の状況が多忙であり、ESD・SDGsを推進する体制づくりに苦労しているのかが分かった。また、ESD推進が負担感や忙しさを増すようでは意味がない。そんなESDならやめた方がいい。ESDは、学び続ける者を元気づける働きをもつ。だからこそ、未来への期待や希望が描けるのである。

ちょうど、大会当日の朝、本校の学校の働き方についてニュース番組で放映されていたので、その話題から現場での課題を話し合いながらワークショップを進めた。「どんな思いでここに?」「今日話し合いたいことは?」について、グループで共有しながら熱心に話し合いは進んだ。最後に「明日から取り組みたいこと～アクションプラン」を記入し、会場を歩きながら多くの人に自分の思いを伝えた。（ふらっとタイム）

第５分科会　【ワークショップ】「持続可能な ESD のための教員の資質能力の育成 ――学校全体で取り組むリーダー教師の育成」②

ファシリテーター　（公財）五井平和財団　鈴木　啓介・中並　千景
発表　埼玉県上尾市立大石中学校　教諭　松倉紗野香
NPO 法人 JAE　理事　塩見　優子

『ESD日本ユース』として活動する２名が学校内、NPO･NGOの２つの立場から、事例を発表。参加者は事例における成功のポイントをグループ内で話し合いながら、自分自身のイメージを膨らませ、「自分がなりたい・自分が育成したい リーダー教師像」について付箋を用いて発表した。

●学校内で取り組むリーダー教師の育成/松倉紗野香

研究主任として「グローバルシティズンシップ科」の創設に関わり、カリキュラム・教材開発、評価研究、教員研修の企画・運営を担当。学校と社会をつなぐ体制づくりを行いながら、学校全体を巻き込みESD推進に取り組んだ事例を、生徒や教員の変化を挙げながら発表。

●学外と連携・協働し、ESDを推進する教師の育成/塩見優子

子ども達が育つ環境に左右されず生きる力を育めるよう、保育園・幼稚園～中学校まで、学区全体で子どものキャリア支援に、学校・教育委員会・地域企業の橋渡し役として取り組む。具体的なプログラムも挙げながら、学外と連携する上でのポイント等を発表。

第６分科会　【ワークショップ】「ESD と SDGs で学校種間の連携をどのように進めるか ――地域を巻き込んだ連携の推進」③

ファシリテーター　静岡大学教育学部　教授　梅澤　収
静岡大学教育学部　教授　田宮　緑
広島市立古田中学校　校長　宮正千鶴雄
発表　広島市立戸山小・中学校　教諭　相川　壮成
広島市立戸坂小学校　教諭　泉　覽花

本分科会では、「ESDとSDGsで学校種間の接続をどのように進めるか－地域を巻き込んだ連携の推進」について、小学校と中学校の連携と海外学校との連携の実践報告があった。２本の実践報告を受け、グループディスカッションでは、各地の情報交換が活発になされ、最後に実践報告に対する質問や意見などを全体で共有し、テーマに迫る討議がなされた。

ファシリテーターからは、多忙な学校現場では、教職員全員の内発的動機付けによる合意形成のもとでのホールスクールアプローチがESD推進にとって重要であり、次期学習指導要領では、ESDが位置づけられていることから、ESD推進の素地はできているとの現状が述べられた。また、学校と地域の関係は以前にも増し、密接になってきている。つまり、地域が持続可能でない限り、学校も維持できない、学校がなくなれば、コミュニティは崩壊するといった相互依存的な関係にある。ファシリテーターによる過疎地を対象とした調査によると、幼小連携が今後の持続可能な地域と学校のキーになること、ESDを推進していくにあたっては、PLCに基づいた新しい校長論についても言及された。

第７分科会　【テーマ別交流研修会】「環境問題を生徒が『ジブンゴト』とする取組」①

司会　福岡教育大学　教授　石丸　哲史
発表　東京都多摩市立青陵中学校　校長　千葉　正法

発表者の多摩市立青陵中学校では、ESDのコンテンツよりコンピテンシーを重視した教育を展開し、この成果をキャリア形成に結び付けている。すなわち、自己調整力、人間関係形成力、社会参加・社会形成力の育成をESDに委ねた教育課程の編成を行った。地域を実践の舞台として、地域と連携しながら持続可能な地域づくりに向けた生徒の取組が紹介され、この取組によって生徒が地域の将来像を描くことが可能になり、結果として多摩市2050年へ向けた生徒の政策提言へと結びついている。

このような生徒の姿はキャリア教育に大きく貢献した。それは、持続可能な地域を創るという目標が設定され、この目標に向かうために生徒が「ジブンゴト」とする姿勢が見られるようになるからである。社会と関わりながら生徒が自分事として取り組むにはどうしたらよいか、フロアからも実践事例が紹介され、自分事とするための方策を参加者で共有することができた。

第８分科会　【テーマ別交流研修会】「平和のための学び ESD for SDGs ――持続可能な社会づくりに向けて育む力」①

コメンテーター　東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター主幹研究員／日本ユネスコ協会連盟理事　及川　幸彦
コーディネーター　大牟田市教育委員会教育長／日本ユネスコ協会連盟理事　安田　昌則

当分科会では、「持続可能な社会づくりに向けて育む力」について、『SDGsアシストプロジェクト』助成校の実践発表をもとに、学び合いを深めた。小中高３校による発表では、地域連携によるカンボジアとの交流、世界遺産を活かしたESD活動や教科横断的なWhole schoolアプローチの実践例が紹介された。トークセッションにおいては、校種ごとに実践例を交えた活発な意見交換が行われ、子どもたちが「自分ごと」として考え行動できるように、小中高それぞれの発達段階で学習過程を工夫していくことが重要であることが確認された。指導助言では、ユネスコ憲章に立ち返った上で「平和」の意味を問い直すとともに、「持続可能な社会」こそが平和な社会であり、その実現に向けた人材育成、教育の必要性が強調された。また、これまでの教育は「自己実現」が主軸であったが、ESDが基盤となったことで、今後は「協働」そして「共生・共創」、「平和」へつながる教育にシフトしていくという前向きな展望が共有された。

第９分科会　【テーマ別交流研修会】「ESD で進める特別支援教育――多様性を視点に学校全体で取り組む特別支援教育」②

司会　中部大学　教授　宮川　秀俊
発表　千葉県立印旛特別支援学校　髙橋　俊輔
助言　中部大学現代教育学部　教授　伊藤佐奈美

第９分科会は、「ESDで進める特別支援教育」をテーマとして、多様性を視点に学校全体で取り組む特別支援教育の在り方を、事例報告をもとに研究協議を行いました。はじめに分科会の趣旨説明を行い、続いてユネスコスクールとしてESD活動を積極的に展開している千葉県立印旛特別支援学校の髙橋俊輔先生より、当校の取組を紹介していただきました。内容は、①当校がESDを“どのようなもの”として捉えて活動を始めたか、②これまでの活動の写真による紹介、③取り組んだ成果と今後の課題などです。当校は、知的障害を有する生徒が多く通う学校で、小学部・中学部・高等部からなる本校と、高等部普通科（職業コース）のさくら分校があります。会場の参加者（約30人）との質疑応答では、“普段の授業で心がけていること”、“近隣の学校との交流での成果”、“ユネスコスクールに加盟してから始めた活動”などについて、活発な情報交換が行われました。

第 10 分科会　【テーマ別交流研修会】「ユネスコスクールが行う海外連携――海外の事例から地域の課題を学ぶ」③

司会　中国学園大学・中国短期大学　副学長　住野　好久
発表　岡山市役所 ESD 推進課　内藤　元久

ユネスコスクールとESDの実践は日本の学校を世界に開き、国際交流に取り組む学校が増えた。しかし、それを持続し、発展させることは容易ではない。岡山市役所ESD推進課からは、2014年に岡山市で開催されたユネスコスクール世界大会の成果を継続するために県内10校で組織された「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」によるブルガリアの高校生との国際交流の取組が報告された。また、岡山県立矢掛高校からその取組の意義と成果が補足された。個々の学校に代わって岡山市が交流の準備をすることで各学校の負担が軽減され、交流活動の事前事後の学習を充実させることができ、生徒の学びを広げ深めることができた取組であった。

協議・実践交流では、より多くの学校が国際交流の機会を得るために学校間ネットワークや行政の支援が必要であること、交流活動をより有意義なものにするためには、事前にテーマを共有して探究の過程を共有し合う国際共同探究カリキュラムの開発が求められること、そして、国際「交流」から「連携・協働」へと発展させること等が議論された。

第 11 分科会　【テーマ別交流研修会】「命を守る教育と ESD ――災害体験を生かし、地域とともに命を守る行動力を育てる」③

司会　宮城教育大学　教授　　市瀬　智紀
発表　三重県桑名市立城南小学校　校長　諸戸　美香

本分科会では、最初に諸戸美香先生より、「災害体験を生かし、地域とともに命を守る行動力を育てる」と題した発表があった。昭和34年に東海地方を襲った伊勢湾台風。本校のある城南地区は、当時桑名市内で最も大きな被害を受けた。伊勢湾台風から60年たった現在、過去の大きな災害を忘れず「自分の命を守る」という行動に活かしていくために、毎年４年生を中心に防災学習を行っている。

生徒たちは、あかりプロジェクト桑名と連携して「地域のゲストティーチャー」や、語り部さん、桑名市の防災専門監などの外部講師のお話を伺い、「自分たちはどうすればよいのか」「命を大切にするとはどういうことなのか」を考えている。また、４年生が学んだ内容を全校・地域に向けて発表している。また、津波警報発令時避難訓練を実施し、６年生が１年生を連れて避難するなどの実践を行っている。

諸戸先生の実践に対する質問では、どうやって地域の関係機関と連絡をとっているのか、他の学年５年生６年生はどのような防災教育をやっているのか、防災意識が薄いところで防災教育をやるのはどうするのか、地域のほかの学校はどうしているのか、などの質問が出された。

続いて、司会者の市瀬から、①3.11東日本大震災の震災遺構、荒浜小学校の活用した授業実践、②3.11東日本大震災発災時の報告書の中にある発災時の教職員の経験を紹介したレポートを提示し、命を守るための防災教育及び学校防災について、参加者51名全体で協議を行った。

協議の中では、参加者の中から、災害に対する意識の薄いところでどうやって防災教育をやればよいか、引き渡し時に子どもを保護者に渡さないという判断をするのは難しいのではないか、災害について恐怖心をあたえないように教育するにはどうしたらよいのか、等の疑問や悩みが提示された。

最後に、参加者の中からは、先生が災害について自分ごととしてとらえられていない。有事の際の学校の危機管理について打ち合わせしていない、との意見が提示されたが、本日の分科会での検討が各学校内でも共有され、「命を守る教育」のための、学校の意識改革につながることを期待したい。

第 12 分科会　【テーマ別交流研修会】「地域社会とともに取り組む ESD と SDGs の活動のあり方とは」③

司会　広島大学大学院教育学研究科　准教授　永田　忠道
発表　広島県熊野町立熊野第一小学校　教諭　中村　祐哉
　　広島県立福山誠之館高等学校　教諭　　髙田　和美

本分科会では、「地域社会とともに取り組むESDとSDGsの活動の在り方とは」について、広島県ユネスコESD大賞の受賞校である熊野町立熊野第一小学校と広島県立福山誠之館高等学校の実践報告をもとに、参加者との研究協議を進めた。熊野第一小学校からは地域との連携を緊密に図ることによる防災・減災教育の継続的な活動の実際を、福山誠之館高等学校からは身近な場所から自分に関わる問題として課題を発見し、持続可能な社会づくりに取り組む生徒の育成を目指すプロジェクトとゼミの実践報告をいただいた。両校の報告を受けて、ESDやSDGsの取組に対する校内や教員の体制のあり方、校区や市町村また広域の地域と学校での活動との関係性などの質疑応答が行われ、広島県とともに島根県や福岡県、大阪府、神奈川県などでの地域社会とともに取り組まれている活動の実際や課題、悩みなどが活発に示されて、意義深い意見と情報の交換と協議が展開された。

ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動紹介）

伊藤忠商事株式会社　～三方よしの精神

伊藤忠商事は1858年初代伊藤忠兵衛が近江の地で創業し、現在は世界63ヶ国（含日本）に約110の拠点を持つ総合商社として幅広いビジネスを展開している。遠方に出向き商売をした近江商人には行商先の地域や人々の信頼を得ることが何より大切だったことから、「三方よし（＝売り手によし、買い手によし、世間によし）」の精神で、世間の為になる商売に取り組んできた。この「世間によし」の精神は、「次世代の育成」「環境保全」「地域貢献」を三本柱とする「社会貢献活動基本方針」にも受け継がれ、持続可能な社会の実現のための活動にグループ会社とも連携して取り組んでいる。

中でも注力する「次世代の育成」の取組の中核にあるのが、1974年に設立した伊藤忠記念財団である。当財団は青少年健全育成を目的とする活動を行うために設立され、「すべての子供たちに読書の喜びを」をテーマに、「子供文庫助成事業」と「電子図書普及事業」を展開している。また、2012年からは子供向け職業・社会体験施設「キッザニア東京」のオフィシャルスポンサーを務め、2019年４月には世界とつながる面白さを体験できるパビリオン「総合商社」をオープンした。子供たちに、テレビ会議で外国人と英語で交渉して、エドウィンの生地を使ったバッグを米国に輸出するという体験をしていただいている。

皆様にも三方よしの精神でご対応させていただきたく、今後ともご指導、ご愛顧をお願いしたい。

発表者：茂木 康次郎（伊藤忠商事株式会社 サステナビリティ推進室／ ISO・社会貢献ユニット長）

オムロン ヘルスケア株式会社　～夢を叶える未来づくり「未来はカラダからだ！」プロジェクト

オムロン ヘルスケアは、「地球上の一人ひとりの健康ですこやかな生活への貢献」をミッションに掲げて事業を展開するとともに、健康経営のための各種施策も進めている。また、事業のグローバル化に伴い従業員の約７割が非日本人となる中で、多様な人財の活躍／ダイバーシティを推進。特に「女性のさらなる活躍」に注力している。

学校現場においても、社会貢献のひとつとして健康の大切さや命の大切さを伝える活動を展開している。「未来はカラダからだ！」プロジェクトは、夢を叶えるために「ココロとカラダの健康」の大切さを知ってもらいたいという思いから生まれた活動で、2017年より中学校・高等学校を対象に、男女一緒に性と健康について学ぶ補助教材「未来はカラダからだ！」を作成し無償配布している。現在までにのべ1,192校で活用されている。また、AEDの認知向上と活用促進を目指した活動も展開している。2018年には小学校高学年を対象に、命の大切さを知り救急救命の流れを理解できる動画教材「命をつなぐバトン－わたしが最初の救急隊－」を作成し公開している。

子供の夢を叶える未来づくりにおいて、自分を大切にして健康でいることは基本だが、集団生活の中で上手くやっていくためには他者の体や健康を理解することも大切である。健康を通じて、子供たちの未来の夢の実現をサポートしていきたい。

発表者：富田 陽一（オムロン ヘルスケア株式会社グローバルコミュニケーション統轄部 グローバルリーダー）

NPO 法人いのちの教室／協賛：カシオ計算機株式会社　～「いのちの授業」の取組

カシオ計算機に在籍中、「命」の視点で持続可能な社会の実現に寄与すべく立ち上げた出前授業「いのちの授業」は、2019年10月24日現在、小中学校中心にのべ660校（幼稚園～大学、行政、PTA、地域からの講演依頼など）、75,000人を対象に実施してきた。カシオ退職と同時（2016年）にNPO法人を立ち上げ、現在に至っている。

子供たちに「命は何だと思うか」「なぜ命は大事なのか」と問うと、それぞれの子供が命について素晴らしい思いを持っていることに気づく。この授業では、こうした子供たちからの学びを基に命について教えるのではなく、子供たちと一緒に授業を作り上げている。子供たちの心から大切な思いを引き出し、自ら考え、気づきを持ってもらいたい。授業の基本プログラムは90分で、前半は何気ない日常にある大事なものに気付いてもらう心を醸成する場とし、後半は幼くして病気で亡くなった子供たちのメッセージを紹介するなど、多角的な視点で命に触れてもらうためにさまざまな話を伝えている。こちらの価値観ではなく事実を伝え、どう受け止めるかは心の在り方に任せながら、会話のキャッチボールを行うというものである。基本プログラムをもとに各学校の要望に合わせて柔軟にプログラムを作成しているので、来年度に向けてご検討いただきたい。

今後も子供たちの心に届く授業の実践に努め、広く社会に受け止めていただけるよう積極的な活動を展開していきたい。

発表者：若尾 久（NPO法人いのちの教室 理事長）

住友林業株式会社　～富士山「まなびの森」環境学習支援プロジェクト！

住友林業グループの歴史は、別子銅山が開坑された1691年に始まる。約200年後、銅山備林の永きにわたる過度な伐採や煙害により、周辺の森は荒廃の危機を迎えていた。当時の別子支配人、伊庭貞剛は1894年、失われた森を再生させる「大造林計画」を樹立し、大規模な植林を実施。結果、山々は豊かな森を取り戻すことができた。木を植えて育て、伐って使ってまた植える。この保続林業の考え方は現在も住友林業にしっかりと息づいている。

この「大造林計画」の記憶を受け継ぎ、台風により甚大な風倒被害を受けた富士山２合目に広がる国有林をもとの豊かな自然に戻すため、設立50周年の記念事業として1998年に開始した富士山「まなびの森」プロジェクトは、ボランティアに支えられ、2018年で20周年を迎えた。2006年からはNPO法人ホールアース研究所と連携し、地元小中学校の児童・生徒を対象とする「環境学習支援プロジェクト」を継続している。このプロジェクトは森を使った体験学習で、野生動物の痕跡探索や樹木・野草などの生態観察、五感を使ったゲームを通じ天然林と人工林の違いなどを学ぶ。これまでにのべ102校9,006人が訪れ（2018年度は10校957人）、2016年度文部科学省「青少年の体験活動推進企業表彰」の審査委員会奨励賞を受賞している。

今後も森づくりや環境活動を通じて、一人でも多くの子供たちに自然の大切さを知っていただく活動を継続していきたい。

発表者：飯塚 優子（住友林業株式会社 サステナビリティ推進室長）

株式会社三菱 UFJ 銀行　～金融の機能を通じた SDGs への貢献

社会の礎として社会的使命を果たすとともに、金融を通じた社会課題の解決に取り組み、持続可能な社会の実現に貢献することがMUFGのめざすCSRである。こうした考えに基づき７つの優先課題（少子・高齢化、産業育成と雇用創出など）を設定し、事業戦略に組み込み施策として推進している。今年５月にはSDGs達成に向けた取組をさらに積極的に行うために、環境・社会分野にサステナブルファイナンス目標を設定した。持続可能な社会の実現に資する事業を積極的に支援するため、2030年度までに累計20兆円のサステナブルファイナンスを実施することをめざしている。

CSR活動を通じたSDGsへの取組も推進している。「MUFG Gives Back」は11月をCSR強化月間に設定し、国内外を問わず従業員が一斉に社会貢献活動に取り組むというもので、東日本大震災の際に日本が世界中から受けてきた支援への恩返しとして2013年から設けている。また、今後の持続可能な社会の実現・維持に次世代の育成は欠かせないとの考えから、2009年から日本ユネスコ協会連盟と協働で、ユネスコ加盟校を対象とした教育助成プロジェクト「SDGsアシストプロジェクト」に取り組んでいる。１校10万円を限度にSDGsの教育に資する活動を行う学校プログラムに助成を行っており、2020年度からは、長期的プログラム（２年間）にも支援できるよう上限30万円の枠を新設した。

今後も次世代を担う輝かしい若者たちを積極的に応援していきたい。

発表者：松井 恵梨（株式会社三菱UFJ銀行 経営企画部 ブランド戦略グループ）

株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー　～“届けよう、服のチカラ”プロジェクト

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトは、店舗で行っている「全商品リサイクル活動」の一環として、2013年に始まった児童・生徒による子供服の回収プロジェクトである。回収した衣料は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて世界中の難民・避難民のもとに届けられる。活動内容は、初めにユニクロ・ジーユーの社員が学校を訪問し、服のもつチカラや世界規模の難民問題について出張授業をした後、児童・生徒が主体的に考え行動し、学校全体や地域社会を巻き込みながら衣料の回収を行なうというもの。活動終了後には、難民に服を届けた様子を写真付きレポートにまとめ、児童生徒の振り返りとして活用いただいている。2019年度は小中高442校、約40,000人が参加し、2013年から現在までにのべ1,889校、約20万人の児童・生徒が参加した。

先生方からは、子供たちが『「世界」や「平和」という大きなテーマを、慣れ親しんだユニクロ・ジーユーや身近な服を入口とすることで「自分にも何かできるかもしれない」と勇気を持てた』『この活動を通して地域の方々と関わることができ、視野を広げることができた。同時に、社会に役立つことを実感することで自己肯定感を養うことができた』などの評価をいただいている。2020年度からは、授業の教材をSDGsや環境問題との関連にもアプローチする内容に更新していきたいと思っているので期待してほしい。

今後も本プロジェクトを通じて、未来を担う子供たちの育成に努めていきたい。

発表者:中野 友華･澤田 祐宜（株式会社ファーストリテイリング　サステナビリティ部 ビジネス･社会課題解決連動チーム）

第10回ESD大賞表彰式

1．受賞校の発表

文部科学大臣賞	：広島県福山市立福山中・高等学校
ユネスコスクール最優秀賞	：東京都多摩市立連光寺小学校
小学校賞	：東京都杉並区立西田小学校
中学校賞	：熊本県熊本市立北部中学校
高等学校賞	：広島県立安古市高等学校
審査員特別賞	：学校法人静岡理工科大学　星陵高等学校
ベスト・アクティビティ賞	：名古屋国際中学校・高等学校
スタートアップ賞	：静岡県立駿河総合高等学校

ベスト・アクティビティ賞は、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他の学校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校に贈られ、スタートアップ賞は、ユネスコスクールに登録して３年未満で優れた実践を行う学校に贈られる。また、本年度の副賞はカシオ計算機株式会社にご協力いただいた。

2．各賞の講評

◆佐野 金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、ESD大賞審査委員長）

各受賞校の講評は、別冊「第10回ESD大賞実践集」参照。

3．各賞授与

◆文部科学大臣賞

賞状・副賞授与：平下 文康（文部科学戦略官）

◆ユネスコスクール最優秀賞、他

賞状授与　　：佐野 金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、ESD大賞審査委員長）

副賞授与　　：木村 則昭（総務部　社会環境企画室　上席主幹）

4．受賞校代表挨拶

◆髙田 芳幸（広島県福山市立福山中・高等学校長）

受賞者を代表して、僭越ながら一言お礼の言葉を申し上げたい。

この度は生えあるESD大賞において、本校が文部科学大臣賞を受賞したことを大変光栄に思っている。本校は明治32年（1899年）の創立で、平成16年（2004年）に中学校を併設した福山市立の中高一貫校で、今年度は創立120周年に当たる。去る６月16日には多くの来賓のご臨席のもと、創立120周年記念式典を行うことができた。

本校は平成28年、福山市教育委員会が推進する「福山100NEN教育」「21世紀型“スキル＆倫理観”」に則り、本校の実践を整理、構造化するとともに、次世代に必要な資質・能力を育む教育に取り組んできた。サスティナブルスクール、ユネスコスクール、ハッピースクール指定など、ESDを軸に学校づくりを進めている。現在、中高の６年間で地域課題解決プロジェクト、国際課題解決プロジェクト、生き方・在り方探究プロジェクトなど、地球・地域の持続可能性の向上と、個人としての資質能力の向上に取り組んでいる。

この度は、本校のこうした取組が評価されたものと大変喜んでいる。この受賞を機に、さらにESDを軸とした学校づくりを進めて参りたい。

閉　会　式

閉会挨拶

◆木曽 功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

福山市で、私自身が小学校から高等学校まで育てていただいた。いろいろな意味で感慨深い思いがある。

14～15年前、文部科学省で国際統括官としてユネスコの仕事をしていた際に、初めてESDに出会った。その当時は、「ESD」と言っても誰も知らない状況で、ユネスコスクールは全国で15～16校しかなかった。古い話だが、「このESDやユネスコスクールをどう広げていくか」ということで、いろいろな先生方と相談した。その頃のことを考えると夢のようなことだと思っている。

午前中の見上先生のお話にもあったが、新しい学習指導要領に「持続発展」というコンセプトが明確に位置付けられたことは、本当に大きなことだと思う。10数年前にESDを推進するにあたり、局内に担当の視学官をぜひ置いてほしいとお願いし、今では視学官が配置されるようになった。また、学習指導要領の中にも明記されるようになったということなので、これから頑張ってよいものを作っていただきたい。

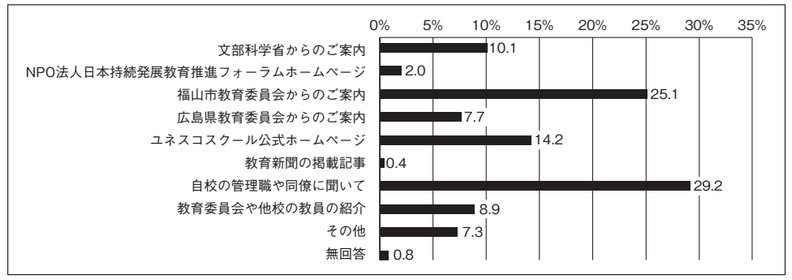
福山市、広島県の取組は全国的に見ても素晴らしいと思っている。午前中に広島県の平川教育長のお話があったが、明確にESDというものを捉え、新しい教育をしようとされている。福山市の三好教育長も深くESDを理解しておられ、ESDを新しい教育のコアとして発展させたいとご尽力いただいている。ある意味で、この地域の教育は21世紀のこれからの教育を作っている進行形のものだと感じている。

関係者の皆様に心より感謝申し上げるとともに、ぜひ自信を持って、このESDを一層推進していただくことをお願いして、結びの挨拶とさせていただきたい。

アンケート結果

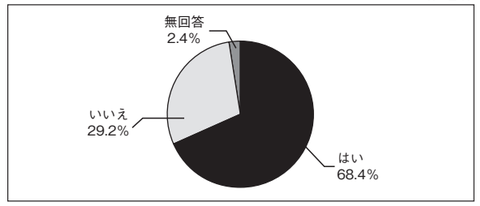
Q1　大会認知経路 (MA)

n=247



Q2　ユネスコスクール加盟校ですか

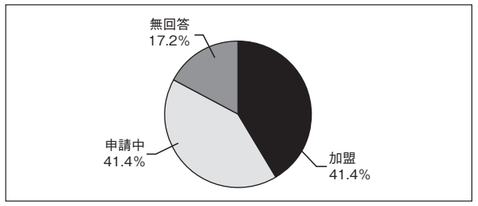
n=247



（ユネスコスクール加盟校の方に）

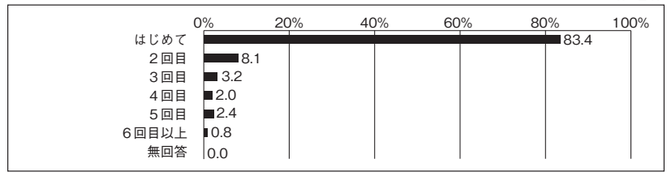
Q2SQ　ユネスコスクール加盟・申請中の内訳

n=169



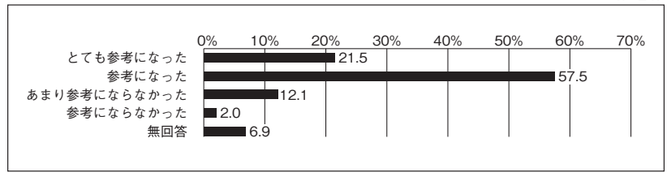
Q3　本大会は何回目のご参加ですか

n=247



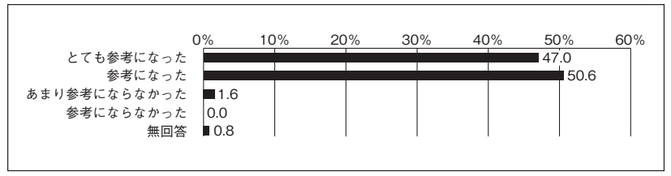
Q4-1　開会式・参考度

n=247



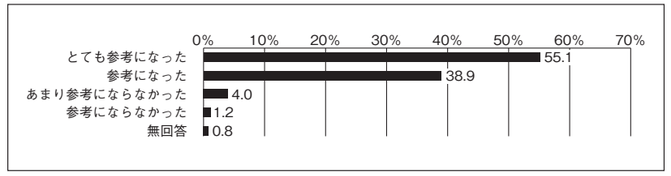
Q4-2　基調提案・参考度

n=247



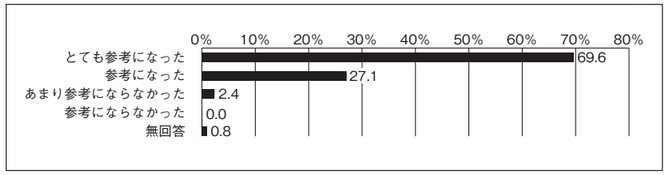
Q4-3　特別講演・参考度

n=247



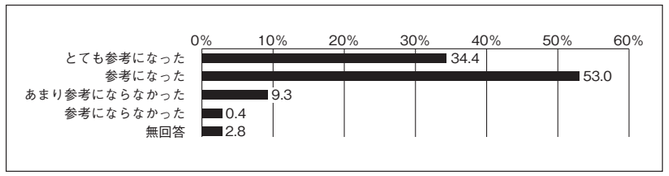
Q4-4　パネルディスカッション・参考度

n=247



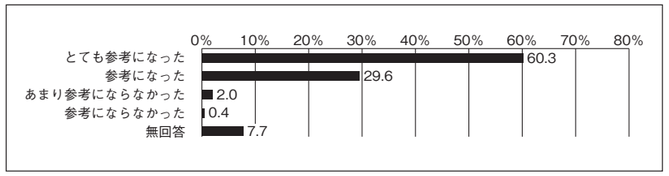
Q4-5　ランチョンセッション・参考度

n=247



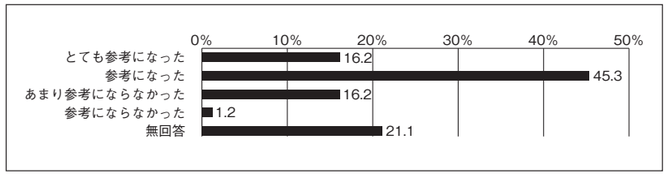
Q4-6　分科会・参考度

n=247



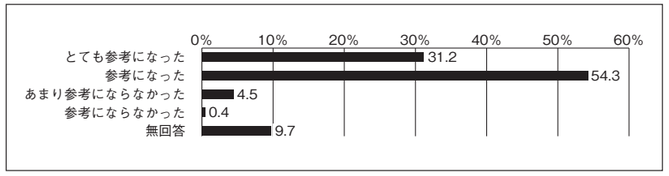
Q4-7　ESD 大賞表彰式･閉会式・参考度

n=247



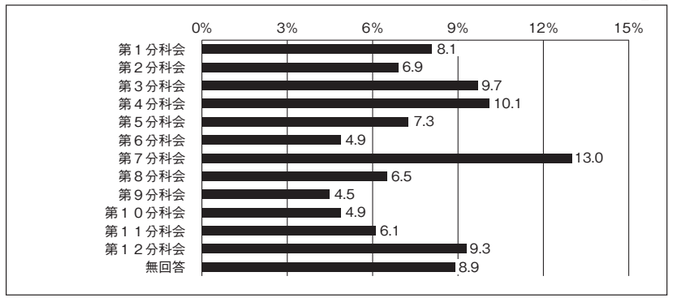
Q4-8　展示ブース・参考度

n=247



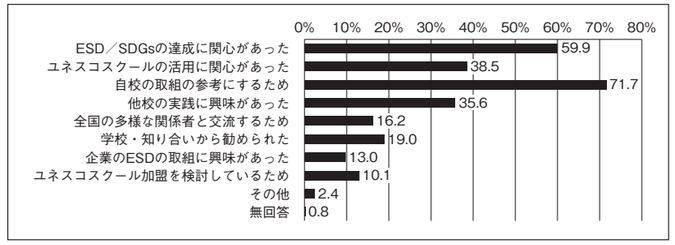
Q4SQ　参加された分科会

n=247



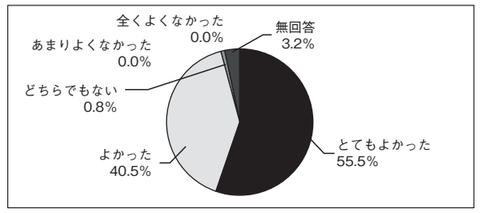
Q5　大会参加目的 (MA)

n=247



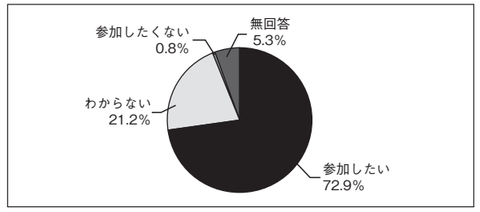
Q6　大会全体の感想

n=247



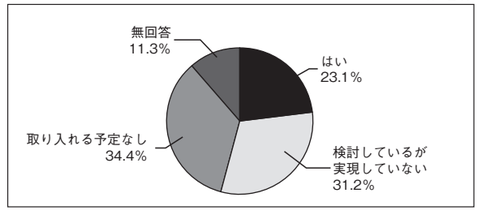
Q7-1　次年度以降の参加意向

n=247



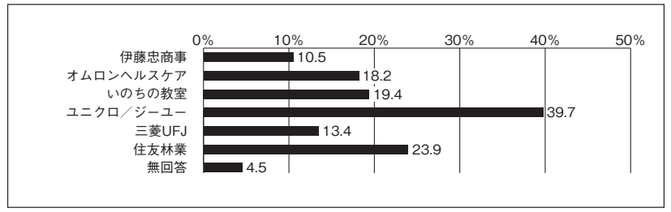
Q8-1　企業と連携した取組をされていますか

n=247



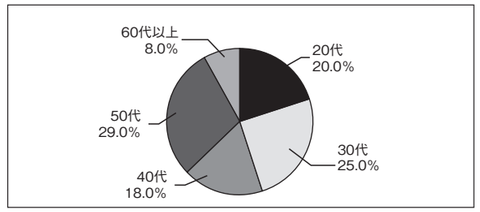
Q8-2　展示ブース、ランチョンセッションで興味を持った取組 (MA)

n=247



■　回答者の年層

n=100



協力企業一覧（50音順）

伊藤忠商事株式会社
オムロン ヘルスケア株式会社
カシオ計算機株式会社
住友林業株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー

展示団体一覧（50音順）

ESD活動支援センター
ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム
ESD日本ユース・公益財団法人五井平和財団
NPO法人いのちの教室
国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構（JAXA）
大牟田市教育委員会
岡山市
近畿ESDコンソーシアム
独立行政法人国際協力機構 中国センター（JICA中国）
一般財団法人ジャパンアートマイル
信州ESDコンソーシアム
一般社団法人全国農協観光協会
株式会社チクマ
中国地方ESD活動支援センター・中国環境パートナーシップオフィス
日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）
日本ESD学会
公益社団法人日本環境教育フォーラム
特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク
日本ユネスコエコパークネットワーク（JBRN）
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
広島SDGsコンソーシアム
社会福祉法人広島県共同募金会
広島県ユネスコ連絡協議会
社会福祉法人福山市社会福祉協議会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

第11回ユネスコスクール全国大会
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会
プログラム

発行日：令和２年３月16日
発　行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
http://www.jp-esd.org/
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町１－40
電話 03－3295－7051
ＦＡＸ 03－3295－7054
E-mail:info@jp-esd.org